

らう」と云つてくれた。

爾來彼はぼて振りの稼ぎの外に、月々幾らかづゝの網料が、親方の手から貰へるやうになつた。かうして二年目には可なりの網主となつたが、今度は漁船を一艘拵へ、それが出来ると、こいつを抵當にして又一艘拵へた。三十反あまりの網と二艘の漁船を持つて、彼もチヨイとした網元になつたが、少しも氣を緩めなかつた。相不變、別府の近在に看を昇いで歩いた――更に一年たつた。

或る晩、彼が帳場で賣上げの勘定をしてゐると、主人があとで一寸奥に来てくれといふ。

「何です、親方」

「外ぢやアないがね、俺も愈々今度機械船(發動機船)を一隻拵へようと思ふんだが、お前も一口這入つてみぢやアどうだ」といふ話だ。

「機械船! 親方がですか?」

日頃の冒險的氣性は知つてゐたが、別府あたりの肴問屋の主人で、機械船に手を出すといふ

のは意外だつた。意外の上に、此の計畫は彼の胸を烈しく躍らすものがあつた。

「親方、本氣にやるんだらうね」と不覺一膝進めた。

「眞面目だとも。だが、機械船を廻すには内海ぢやアどうも芳ばしくねえ。朝鮮の海を目當てに筑前の八幡あたりに出店を出してえと思ふんだが、どんなものかな」

「結構ですとも! 是非私も一口入れて貰ひます」と熱心に云つたのは、此の機械船を買入れて日本海の荒海に乗り出させ、大きな漁業をやつてみたいといふのが、彼の前途に思ひ描いてゐる烈しい望みだつた。

### 一 海運界に乗出す

間もなく機械船が建造されて、進水祝ひの盛宴が張られたが、客がみんな歸つてから、主人はまた彼を奥に呼んで、

「ところでな豊、お前も承知だらうが、八幡に俺の出店を拵へておいた。幸ひ主も株主だから、



そこへ行つて萬事を見て貰ひたいものだ」と頗るだしいぬけの言葉。

「株主つたつて、たつた一口ぢやアムいませんか……」

「一株でも株主は株主だ。早速準備をして、船を向ふへ廻はすやうにして貰ひたいのさ。俺ア一言も口出しはしねえつもりでゐるんだから、主の頭腦一つで仕事をやつてみねえ」

「しかし……」

「びく／＼するこたアねえさ。損をすりやア元々だ……豊、俺も肴の荷を昇いだ昔があるぜ」と笑つたが、此の腕も人間もよく出来上つた主こそ、實に先代尼崎伊三郎で、その頃は未だ單なる主従の間柄に過ぎなかつたのである。

「それぢやア、やらして貰ひませう」と彼も力強く引受けて、數日の後、別府を發つて八幡に出かけて行つたが、兎に角ぼて振りから一躍機械船の取締になつたといふので、別府では却々の評判だつた。

今でこそ八幡は製鐵所で盛つて、東洋のマンチエスターなんぞとたいした格になつたが、そ

の頃は漁師の網ばかり干してあつた淋しい漁村で、新造の機械船が來たといふので、みんな珍らしがつて、濱に出て見物したものだといふ。

時に明治二十三年、彼れ二十八の働き旺りで、いよく／＼自分一個の意見で大掛りな漁業に着手したが、主の計畫も彼の手腕も悉く業運に叶ひ、大漁また大漁でトン／＼拍子に儲け續け、明治二十五年には、漁業の方は全部主人の手にまかせてしまつて、自分は獨力で崇敬丸といふ蒸汽船を建造し、中國筋の運輸航路を開いたが、これまた時機に投じてメキ／＼資産を作り上げ、六年前別府の海岸でメソ／＼泣いた男も、心機一轉、三十になるや成らずで、一本立の立派な男になることを得た。

人間の運といふものは、何處に付うころがつてゐるか分らぬものだが、同時に此の尼崎伊三郎くらの、二十歳代に飛び離れた變化を見せた人間も少ない。

で、兎に角これが彼の海運界に乗り出す成功の第一歩となつて、次で明治二十七八年の日清戦役の前には、崇敬丸の外に運輸丸、電信丸といふ二隻を新造して、軍隊や軍用品の輸送を



引受け、これですつかり事業の基礎を固めて、大阪に本據を据え活躍を續けてゐたが、明治三十二年の六月、突然別府の主人の家から「キトク、スグコイ」の電報を打つて來た。彼は取るものも取敢へず、別府へ飛んで行つた。

一 主家を襲ふ

行つた時にはもう殆んど臨終に近かつたが、それでも意識だけはハッキリしてゐて、先代の伊三郎はぶる／＼慄へる手先で彼の手を握り、

「豊！ 俺の跡を見てやつてくれ」といきなりこれを云つた。

尼崎家は當時散々な不運續きで、前の年にはたつた一人の相續人を亡くし、事業の方も何彼とケチが附いて左り前になつた上に、今度は主人が今にも知れぬ此の始末だ――

「引受けました。安心なさい」と力をこめて云つたが、病人は末期の苦痛に顔を擧めながらも、

「ヒ、キ、ウ、ケ、タでは、駄目だ、駄目だ！……ア、尼崎の相續人になつてくれ」

ぐるりの親族の顔にも、哀願の色が強く現はれてゐた。

「主人、永い間の御恩返しが、それで出来るなら寧ろ果報負けた。私は悦んで當家に入りますよ。御安心なさい」と數條頬に下る熱いものを感じながら云つた時、先代の目からも涙が自然に流れ出てゐた……

而して間もなく安らかに他界をしたが、松井の姓が尼崎に變り、豊太郎が伊三郎となつたのはこれから以後である。

一 嚇々たる成功

却説、愁嘆場の描寫は本書の使命でないから、テンポを早く先に行くこととして、彼が尼崎伊三郎を襲名してから數年、日露の風雲漸く急ならんとするや、特に朝鮮航路の有望に着眼し、新造船を提げて、直前これを開始したところ、果然開戦となり、彼の持船は全部國家有事の活躍をなすと共に、所謂業者としての千載一遇の好機に際會した。殊に浦鹽艦隊出沒のため、日



本海方面の商船が惱まされて、一時交通杜絶の状態にあつた時、彼は敢然船員を督勵して、此の方面に大膽無類の活躍を續け、大いに巨利を獨占するを得た。然も北鮮航路に多大の貢献をなした故を以て、後、明治四十二年韓國皇帝から勳三等大極章といふのを貰つたりして、船成金以外に大分男を上げた。

戦後益々事業を擴大して、四十年五月には長崎島原間航路、四十二年宇品今治間航路、四十二年岡山高松間航路、大正元年宇品三津航路と新航路を開設して、海運界に却々目ざましい活動をしたが、他面、尼崎大阪市内其他に買つておいた老なる地所が、毎年鰻上りに非常な値が出て、それだけでも優に數百萬圓の資財となつたのに氣を得、造船所、炭鑛などの新事業に手を延ばして、遂に關西の財界で押しも押されもせぬ成功者と成つたのだが、以前を云へば淀川筋の大根船の船頭上り、それが矢張り舟で成功したところは面白い。

兎に角若い時分に生き死にの苦勞をして來ただけに、よく人情も噛み分ければ、人間を使ふことも上手、相當世間に名が出てからも、公私我慢強く自己を生かさうとする一點では、チヨ

イと他人の眞似の出來ぬ藝當があつた。

「人間、死を覺悟した時の心持でさへ居れば、何事でも成就出來ぬことはないのだがなア」とは、かつて本人が公の席上で、不用意？にも傍人に洩らしてゐた一語である。

二十五歳、もう俺は遅い——なんて意久地のないことをボヤク人間に、筆者は敢て此の一篇を薦めたい。

### 均一販賣の創始者ウールウオース

#### 一 野呂間な店員

世界の富が波浪の如く流れ込み、ドルの洪水が渦を卷いてゐる米國の中心地ニューヨーク、そのまた中樞のブロード・ウェイの目抜の場所に、群立する數十階の大夏高樓を眼下に見下して聳え立ち、世界の遊覽者の度膽を抜いてゐる五十八階の摩天樓ウールウオース・ビルディング



は、僅か五仙十仙の均一販賣法で戦つた彼れウールウオースの、奮闘五十年の歴史と勝利を物語る黄金塔なのである。

世界一のウールウオース・ビルディング——この偉大な成功を贏ち得たウールウオースは、一八五三年四月十二日、米國ニューヨーク州のロードマンといふ田舎町の片ほとりに生れ、家は貧しい百姓で、「靴を穿いて彼は小學校へ通ふことも出来なかつた」と云はれてゐる位の、惨めな少年時代を持つてゐる。それでも小供の時から出来がよいので、彼を更にウオーター・タウンの商業學校に入れて、彼の両親は削肉削骨の苦痛を嘗めて二年間勉強させた。

で、商業學校を出ると、彼は同市のアウグスブライ・ムーア商會といふ雜貨店に、一週三弗の俸給で雇はれることになつた。彼は年來の希望が叶つて、商業の第一歩に踏み出すことが出来たといふのでわけもなく喜んだ。ところで、彼は自ら意外な事實を發見せざるを得なかつた。即ち彼はそれまで自己の商業的才能といふことを、餘り深く考へてみたことがなかつたが、さて店員になつてみると、多くの品物の値段を記憶したり、満足に傳票を書くことさへ出来な

かつた。況んやお客の應接などは、てんで問題にならなかつた。

筆者は出来得る限り忠實に事實を傳へることを任務とする。あれだけの大商業家となつたウールウオースに、こんなセルス・マンとしての無能なスタートのあつたことは不可解のやうだが、事實は更に烈しかつたのである。彼ののろま加減と商店員としての極端な無能振りは、譯もなく周囲の輕侮と嘲笑の對象になつて、何時まで経つても『ロードマンの驢馬』と鈍物扱ひをされた。それでも彼は將來大商業家になりたいといふ一心で、五年間ムーア商會に辛棒してゐたが、憫むべし、其の辛抱に酬いられた俸給は、五年目にやつとまだ一週五弗に過ぎなかつた。

一心機一轉

それから二十六の時に、彼は一週十弗でブシユネルといふ男の店へ雇はれた。そこで彼は結婚をして小さな家庭を作つたが、こゝでも其の鈍骨振りで主人から愛想を盡かされ、俸給を一



週八弗に値下げされた上に、頭ごなしに罵倒された。それまで雇主から何と云はれても、同僚から頓馬扱ひされても、決して怒つたことのない彼も、此の俸給の逆轉と散々な罵倒が餘程癢に觸つたとみえ、猛然ブシュネルに向つて反抗的態度を見せたが、激憤の結果極度の神経衰弱、男のヒステリーになつて、ベッドの上に横はる始末となつた。彼は病み呆けた身體を、貞淑な若い妻君に助けられながら、ロードマンの兩親の許へ歸つて行つた。さうして其處で、親しい者達の看護と慰藉の下に、一年あまり静養した。

彼の健康は案外早く恢復した。ウールウオースは後年「それは母親と妻との心からなる慰藉のお蔭だ」つたと人に語つてゐる。而して最も不思議なことは、此の激しい神経衰弱の後で、彼は別人のやうに活潑な頭腦の持主になつた。全く奇蹟のやうに、彼の氣分も性格も一變した。これは或ひは變態心理學のカテゴリに屬することかも知れない。

で、病後間もなく、彼は最初雇はれたアウグスブライ・ムーア商會にもう一度勤めた。おきにムーア氏は此の「ロードマンの驢馬」が、すっかり賢くなつてゐるのに氣がついた。彼は

テキパキ商賣をやつて、昔の仲間を驚ろかした。その頃ムーア商會は什うも營業が振はないので、主人も内心少なからず頭を悩ましてゐた。

或る日、ムーアは彼に向つて、  
「斯う商賣がダレては面白くない。何とか繁昌させる名案はないかね？」と屈托半分に相談を持ちかけた。

「さやう、私が病氣で寝てゐる間に考へたのですが、竟り時々販賣法を變へるんです。棚ざらしや疵物で、迎も普通の値に賣れない品を、澤山店先に積み上げて、よりどり一つ幾らの札でやつてみるのですな」

こんなことは今日別段珍らしくないが、當時、尠くもアメリカの商人は知らなかつた。「それは面白い。買手の人情に觸れてゐる」といふわけで、早速翌日から店頭テーブルを持ち出し、まづ「よりどり一個五仙」の札をつけてやつてみた。すると、忽ち人がたかつて賣り切れた。又積み上げるともう賣切れといふわけで、ムーア商會の「五仙均一」はすっかりウ



オーター・タウンの大評判になり、毎日押すなぐの盛況で、ウールウオースの商略は見事成功を収めてしまった。ムーアは寧ろ驚ろいてしまつて、  
 『どうもこんな簡単なことで、買手が押し寄せるとは想はなかつた。君は實に偉い』と何度もウールウオースの肩を叩いたが、これで彼は主人の信用を全部かちえてしまつた。

### 一五仙均一商店

併し、ウールウオースの均一販賣法は、無論ローズ物ばかりを賣らうといふ消極的な目標ではなかつた。彼は此の方法で、新しい商品をどしどしはいてみたいものだ、といふ理想を當初から持つてゐた――

ところで主人のムーアは、ウールウオースの手腕と人物をすつかり見抜いた。『こんな男をむざ／＼自分の店で使用人として使つてゐるより、寧ろ獨立させて「均一販賣」で思ふさま働かしてみたい。將來自分の力にもなる男だ』と考へたので、彼に向つて、

『どうだね、ウールウオース。僕は君に三百弗の資金を提供するから、一つ獨立でやつてみる氣はないか？ 若し足りなくなつた場合は、五百弗でも千弗でも後を融通するよ』と、かういふ話だつた。

無論、ウールウオースは小躍りして喜んだ。彼は『自分の成功への第一歩が始まつた！』と思つた。

で、彼はムーアから借りた三百弗で直ぐに商品を仕込み、ウチカ市で旗擧げをして、五仙均一商店の蓋を開けた。次でランスタ市に開店した。何れも非常な評判と上々の成績を擧げたが、同時に市内の小賣店が彼を眞似て、均一販賣をやるものが、日本流に謂へば、雨後の筍の如く簇出した。中には『これはいゝ思ひ付きた』といふので、大資本を擁して大々的に向ふを張る者も現はれて、云つてみれば一人で多くの競争者と戦はねばならぬ破目になつた。併し彼は、有りつたけの勇氣と智力と忍耐とを以て、飽迄猛烈な競争戦を續けた結果、着々相手を征服して、ランスタ市の多くの出來星五仙均一商店の客は、殆んどウールウオースの店に吸



收され、彼一人凱歌を奏した。

そこで彼は、更にスクラントンとヒイラデルヒアの二市に支店を開設して奮闘したが、どういふものか、フイラデルヒアは薩張り旨く行かず、とうとうこれは三月で閉店してしまつたくらゐだが、雇主と喧嘩してヒステリーを起した昔と違つて、今や彼は失敗すれば失敗するほど強くなつた。

### 一 猛烈な競争

彼の大なる目標は矢張りニューヨークだつた。彼は自分の均一販賣法が、大都會に乗り出せば乗り出すだけ、成功する性質を持つてゐると信じて疑はなかつた。

彼がニューヨークの黄金街、ブロード・ウェイの一隅に乗り出したのはそれから間もなくだ。こゝで成功するかないかは、彼の最後の目的たる一流の商業家の實力を、勝ち得るか否かの岐路だつた。

彼はウールウオース均一商店の經營のために、寧ろ物凄いくらゐの奮闘をした。その結果健康を害し、チブスに罹つて二月餘り石炭酸臭いベッドに横はらなければならなくなつたが、熱が少し下がると、ベッドの上で事務を取り出したのには、店員も醫者も其剛情我慢と熱心に驚嘆せざるを得なかつたといふ。

ウールウオースのニューヨークに於ける均一販賣は、五仙と十仙の二種類だつたが、矢張り他市に於ける時と同様、續々模倣者が現はれたこと云ふまでもない。そこで彼は、一般に四十仙五十仙で賣る普通の品物を五仙十仙で賣り、競争者が鯁銚立しても眞似の出来ない思ひ切つた方法を執つた。といつて、別にストック品や誤魔化し物を賣つたのではない。これはどういふ理由かといふと、製造家に一萬ダース、二萬ダースといふ大量の注文をして、一割の利益を加へて五仙、十仙で販賣が出来るやうに拵へさせたのである。製造家の方でも、百ダース千ダース以下では、二十五仙或ひは五十仙賣りにしか出来ないが、萬からのダースになれば、一割の利益を含めて一個五仙なり十仙賣りになり、製造を引受けることが出来る。ウールウオ



ースは竟り此處を狙つた。人の創意を真似てやつて行かうといふ商人には、とてもこんな思ひ切つた藝當は出来ないが、ウールウオースにはそこを押し切れる強味があつた。普通の店では二十五仙のものも、彼の均一店へ行けばタツタ五仙で買へる。他所で五十仙のものを、僅か十仙で彼の店は賣つてゐる。顧客は否が應でも彼の店から買はざるを得ない。随つて彼の店は、忽ち競争者を壓倒、否、驅逐してしまつた。當時市中いづれの店でも五十仙で賣つてゐた指輪を、矢張り一割の利益を含めて十仙賣りに造らせた時などは、一年間に無慮六萬ダースを賣つたほどだつた。兎に角彼はさういつた特殊な品物を、途方もない安い値段で何萬となく製造させ、それを獨特の五仙均一、十仙均一の破格な値段で賣つたから、年に何萬何十萬といふ大量の同一商品が、それこそ『嵐に吹き飛ばされる』やうに賣れた。

彼の均一販賣法が全米の商業界に響き渡つたのは此の頃で、例のデパートメントストアー王ワナーメーカーでさへ、いち早くウールウオースの販賣法を採用したことは、前に記した通りである。

## 一 一軒の賣上年額一億圓

かうしてウールウオースは、ニューヨークを中心に非常な速度で、全米は勿論、英國から加奈陀に亘つて數百の支店を拵へたが、それら多數の支店が上げる莫大な利益は、一時全く洪水の如く彼の懐に流れ込んだと云はれる。

で、一九一八年、即ち彼の亡くなつた年の前年、一坪何萬弗といふブロード・ウェイの最目抜に、最初に記した世界一の高層ビルディングを建築して、高い建物に見慣れてゐるニューヨーク市民を呀と云はせたのだが、此のビルディング内の一千三十八ヶ所の均一賣店に於ける一年の總賣上高は、ザツと二億萬圓以上に上るといふのだから、實に驚ろかざるを得ない。

ウールウオースの成功は、創意——創始者といふところに矢張り絶對の強味があつた。

『事業といふものは、丁度小供の轉がして喜ぶ雪達磨のやうなものである。勇敢に屈せず撓ま



す、苦しくとも辛くとも、前へ〜と押して行かなければものにならない。それを押して行きさへすれば、押すに従ひ、行くに従つて益々大きくなるが、若し途中で停止すれば、直に事業の雪達磨は溶けて無くなつてしまふだらう」

—ウールウオース—

### 三井の柱石藤原銀次郎

#### 一 ませた少年

財界も大川平三郎や藤原銀次郎の時代になつて來た。どつちも王子製紙で男となつたのだが、藤原は三井系中、最も油の乗り切つた事業家として自他共に許し、昨年は勅選議員にまで推薦されて、本人も嘸かし得意だらうが、此の藤原が未だ操觚者上りでゴロ／＼してゐた昔、その人物を見込んで三井に引張つた例の中上川彦次郎には、矢張り人を見る明があつたと云は

ねばならぬ。

藤原は信州人で、明治二年六月北信善光寺平の、上水内郡平柴村字安茂里といふ、かなり覺えにくい名前の土地に産聲を擧げた。

家はかなり豪農で、先考茂兵衛は勤勉實直そのものゝやうなタイプだつたさうだが、藤原は其の三男である。幾ら豪農でも、百姓の三男坊では所謂ヒヤメシの身分で、行く／＼は田地でも別けて貰つて、分家の小旦那で通る位が關の山だつたらうが、藤原は小供の時から、その邊の考へが却々ませてゐた。

恰かも彼の母方の親戚に當る某といふのが、田舎ではちよつと珍しい程の才走つた人間で、農事のかたはら手廣く藍玉の取引などをして居たので、それを年中見てゐた彼は、幼少時分から「俺も今に大商人にならう」と、小供心に何時も力んでゐたものださうだ。

藤原が今日の性格に見らるゝ通り、かなり膽汁質な一面に、才氣喚發の反面を有するのは、恐らく前記の父方と母方との兩特性を享けたものであらう。



そこで彼は百姓が嫌ひな代りに學校の出來が良く、土地の小學を終へてからも約二年ばかり、檜山塾といふ漢學塾に通つてゐたが、時世の『文明開化』の風は、信州の善光寺平にも遠慮なく吹き込んで来た。

彼はこれから先の立派な商人になるには、新しい學問が必要なを感じて、十五の時、所謂笑を負ふて東都に出て来た。

### 一 二十臺で新聞社長

併し、藤原の父兄は、その頃東京に子弟を出す者の擧に倣つて、是非とも彼を醫者に仕立てるつもりだつた。藤原は心中大いに不平だつたが、親兄弟の意見で致し方なく、當時神田にあつた獨逸協會學校へ入學して、一二年獨逸語を勉強した。けれども、どうしても病人の脈を取つて一生終る氣になれなかつたから、いろいろ親仁や兄貴を口説いて、遂に素志通り學校を三田の應應義塾に變へ、明治二十二年其の正科を卒業した。當時の儕輩には、久原房之助、北海

道炭鑛専務の磯村豊太郎、並に死んだ私設外相の望小太氏などがある。

然し學校は出たが、却々思はしい口もなく、福澤諭吉先生の徳憑する儘に、その推薦で島根縣の松江日報の主筆記者で行くことになつた。口がないといつても、學校出たての青二才が、地方新聞なりにすぐ主筆になれた時代だから、矢張り今日から見れば、就職難の程度が餘程違ふ。

時に行を共にした者に、同じく義塾出の先輩柳莊太郎があつたが、當の柳は一年たらずで東京へ歸つたので、それ以後は彼が經營の一切を引き受け、進んで社主兼社長といふことになつた。松江日報は田舎新聞にしても相當格のあつた社で、その頃まだ二十幾歳の若造であつた筈の藤原が、僅か一二年の間に社主兼社長になつたのだから、最初は古手の記者共にまで睨みが利かなくて困つたさうだが、兎に角彼は實に眞劍になつて、此の地方新聞の經營に奮闘した。松江日報は當時經營頗る困難で、時には明日の紙代にも差問へるほどの窮狀だつたが、彼は所謂堅忍不拔、能く此の難苦に堪へて、約五ヶ年拮据經營した。



今日は新聞事業も、一流所になれば立派に資本主義化した。昔の地方新聞なぞと来ては、大概政黨か官憲の御用で、事業そのものにてんで營利的の精神を持たなかつたものだが、最初から財界に志して、理想を實現したくらの藤原だから、放漫な事業精神にあきたらず、故々として新聞の營業化に努めたものであつたさうだ。而して當時改進黨の機關紙だつた山陰新聞を凌駕して、とう／＼縣下第一の勢力紙たらしめ、時の知事大浦兼武の知るところともなつたのだが、若い時分に、此の新聞といふ難物に苦しんだのが、どのくらゐ藤原の大成に役立つたかも知れぬのである。

### 一 破格の昇給

で、藤原も永く新聞經營をやつてゐる氣がなかつたから、いゝ加減なところで見切りをつけて足を洗ひ、頻りと實業界に入る傳手を求めてゐる中、鈴木梅四郎の紹介で、最初に記した中上川彦次郎に知られることゝなつた。

當時中上川は井上馨の斡旋で三井に入り、部下に人材を養成して、大いに羽翼を張らんとする時期であつたから、中上川は藤原の有爲の材を見込んで直に三井銀行に引張つたが、これが抑々彼が三井の畑で、非常な出世をした開運の緒口である。

最初は五等手代の格式(月給三十圓)で本店の調査課に勤めたが、實際の業務を見習ふためといふので、その後一ヶ年ばかり大津支店へ廻された。次いで月給が四十圓に昇給して本店へ呼び返され、御大中上川の御目がねで、その時新たに設立された深川出張所の主任になつた。此の出張所は、廻米問屋などの在庫米を抵當にして資金の融通をするのが唯一の仕事だつたので、最初の主任となつた藤原はまづ倉庫及倉庫證券などの改良をした後、深川とて廻米問屋ばかりでなく、其の他にいろ／＼な商人も居り、且つ千葉縣方面からの門戸だから、此處に一般銀行業務を開始するの有利有益を説き、銀行幹部の承認を得て、それを實行することになつた。

そこで、藤原は先づ以て營業案内とか其他廣告的意味のチラシを拵へ、深川本所を中心にし



て、遠く房總まで配つて歩かせた。今日でこそ、いかなる真似は珍らしくも何んともないが、その當時は僅か賣業者くらゐが之を實行してゐるに過ぎなかつたので、舊弊一點張りだつた銀行が斯様に一風變つた宣傳を行つたといふことは、頗る界限の驚異を買つた。従つて効果も著しく、一回毎に三十萬圓から四五十萬圓の預金を集め得て、僅々一年足らずに、早くも一千萬圓の預金を獲得することが出来た。

で、藤原は此の成績を齎して本店に中上川を訪ふと、中上川は、

『ウム、それは結構、それは大出来……』と頻りにうなづいてばかりゐたが、四五日経つて深

川出張所へ一通の書状が届き、藤原の月給が一躍六十圓に昇給した旨を傳へた。

全く話の種だが、藤原は此の本店からの通知で狂喜亂舞した。成程、歩合から云へば五割の昇級で、當時に於ける三井の俸給制度では、實際破格の大昇級であつたのである。

### 一 少壯支配人の腕の冴え

藤原は此の出張所主任を二年ばかりやつて顯著な成績を挙げ續けた。ところで、當時三井工業部で經營してゐた富岡製絲所の成績が什うも思はしくなく、是非とも此の整理を斷行するために、若手のウンと腕のいゝところを向けたといふ議があつて、工業部長の朝吹英二の懇望で、白羽の矢が藤原に立つことになつた。

富岡製絲所といふのは、フランスの技師が最初設計した官營工場で、其の後三井工業部へ拂下げられたものだが、御役所仕事のだら／＼した調子が残つてゐて、却々はか／＼しい成績が擧らず、毎期々々の缺損續きで、流石の三井も之れには手を焼いてしまつた代物だつた。そこへ改革に乗り込んだのが、當時二十八だつた藤原で、事業不振とは云へ、六百の釜數と千人近くの従業員を擁してゐた工場の支配人としては、まづ誰が見ても驚く位の若さだつた。

然るに此の少壯支配人は、年は若い遣ふことは實にキビ／＼してゐて、ストライキなんぞにも二三度遭ひながら、少しも凹垂れずにドン／＼内部の改革をした。それまで日給制度であつたのを、目取法と稱する受負制度に改正して、會社の利益を斷行したのも彼の遺した仕事で、



居ること三年、立派に整理の目鼻をつけた。無論これには背後に中上川の息がかゝつて居り、朝吹の信頼があつたればこそだが、兎に角深川出張所主任として中上川に認められ、富岡製糸所支配人として朝吹に喜ばれた藤原が、次第に三井幹部の信用を得るに至つたのは當然で、其の信用を置かれた結果は幸か不幸か、彼は何時も難局ばかりに選まれて廻され、然もその何れをも見事に切り抜けて、その度毎にぐんぐん自己を大きくしていつたのである。

### 一 王子製紙に乗込む

富岡製糸所の整理が一段落着くと、彼は又もや『王子製紙へ行け』といふ幹部の命令を頂戴した。

王子製紙の沿革は先に大川平三郎のくだりに記したと思ふが、明治七年澁澤榮一の創立にかはり、我國に於ける最古の製紙會社だが、創業以來種々たる事情のために、社運兎角に萎微して振はなかつた。之れに加ふるに、その頃は澁澤系の重役と三井系の重役の間に或る種の軋

轢を生じ、澁澤社長がサツサと退却してから後、専務の傲岸兒大川平三郎も結局其の椅子を投出してしまつた。そこで三井系では社長はそのまゝ空席にして、中上川幕下の藤山雷太を専務に就けて一切を切り廻させたが、大川系の職工連がいつかなきかず、事毎にストライキその他の勞働爭議ばかり起してゐた。

恰かも當時は、製紙事業に大改革を施さんとして種々なる試みが行はれ、従來の製紙は其の原料を藁や楮に限つたのを、木材原料に變へて、静岡縣の氣田及び中部に新たに二工場を設け、天龍川を利用して水力電氣を起すなどして、茲に本邦最初の新聞用巻取紙の製造を開始してゐた。

然るに此の整理改革が又もや大川派の乗するところとなつて、猛烈な反對運動が試みられ、流石の藤山も只一人の力では到底支へ切れぬやうに見受けられた上、脊髄病が發作して大分重態と見受けられて來たので、中上川が再び彼を起用して、此の難局に當らしめようとしたわけだつた。



兎に角かうした経緯で支配人になつた彼は、先づ藤山専務を病床に訪ねて一切の指揮を仰ぎ、當面の事態を收拾することに全力を注いだのだが、其の時の騒動が如何に深刻なものであつたかは、新支配人の藤原の引移る社宅に、若し反対派の職工が潜んでゐて危害を加へてはと云ふので、警察側では天井裏から縁の下まで一々搜索し、移轉後四五日間は巡查をして立番せしめたといふ一事を以て、充分窺ひ知ることが出来よう。

### 一 三井幹部の軋轢

ところで、大川派の反會社職工は、會社が三田系の時事新報の用紙を漉いてゐるのを奇貨とし、先づその製造に支障を生ぜしめて、時事新報を休刊の憂目に遭はせて以て勝利を得んといふ戦術で、着々その實行を期しつゝあつた。云ふまでもなく三井の幹部は、中上川を初め藤山、藤原まで三田の出身である。

藤原は早くこれを知つて、事態そこに到らしめては大事と、逆手を使つて大川系の富士製紙

から、優秀職工を出来るだけ引抜いて来て、大いに作業的に對抗し、巧く時事新報の用紙だけは間に合はせることが出来たが、兎に角此の時の大川對藤原の喧嘩などいふものは、お話しにならぬ泥試合であつたのである。而してこれに勢を得た藤原は、幾度か氣田や中部に出かけて騒擾の鎮撫につとめ、大川派の占領するところとなつてゐた右兩工場を元に收めて、約一年後に漸く常態の會社に復せしむることが出来た。

併し、此の長期に亘る騒擾のために、さなきだに事業不振だつた王子製紙は更に數百萬圓の損失を新たに負ひ、茲にあの會社の業運の發展を妨ぐる一大禍根を残したのである――

で、恰度その當時のこと、三井の双壁、銀行の中上川彦次郎と物産の益田孝との間に、些か勢力争ひに類する葛藤が陰に陽に行はれつゝあつた。之れを工業部の朝吹英二が非常に心配して、此の軋轢をやめさせるには、どうしても中上川幕下の俊才を、益田配下に移して兩者の融和を圖る外はないといふので、朝吹は一夜密かに益田を訪ふて、藤原銀次郎を物産に重用すべきことを説いた。こゝが朝吹英二といふ男の味のあつたところだらうが、益田も藤原の人材



振りに最も囑目してゐた際だつたから、一も二もなく賛成して、自ら進んで藤原を懲罰した。そこで藤原も王子製紙ではかなり氣を腐らしてゐたところだつたし、幹部の意のあるところも略々推察出来たから、喜んで王子製紙の支配人から三井物産に轉することになつて、明治三十二年九月、上海支店次席として赴任し、それから漢口にしばらく居つたが、間もなく臺北支店長に榮轉した。

### 一 煩悶引受所長

藤原は臺北支店長としても見るべきものが多かつた。樟腦の專賣權をサミュエル商會から三井の手に移したり、又セルロイドの輸入を企てたりしたのも實に彼の力だが、就中彼の國家的功勞として世間から屢々特筆大書されるのは、日露戰爭當時、例の皇國の興廢此の一舉にありとした日本海々戰の起らんとする少し前、豫め滿洲に在る三十餘萬の我軍隊のために糧食を輸送して置く必要のあつた時、内地の米界は風に臨んで騰貴せんとする氣配を示した。之れを

時の民政長官後藤新平が藤原に諮つたので、彼は疾風迅雷的に糧食の買收を行ひ、臺灣に於ける在米の約三分の二までも、月餘に牛莊港へ送り届けて、天晴れ政府筋からも御褒めの言葉を頂戴した。

この事があつてから少し後、藤原は多少慰勞的の意味を含んで現職の儘三井から外遊を命ぜられ、約一ヶ年歐米を視察して來た。

で、恰度その當時のこと、三井物産の木材部では、日露戰爭直後の好景氣に乗じて、北海道地方の山林へ餘り多額な資金を投じ過ぎたために、反動來と共に忽ち數百萬圓の損失を招いて、外部でも大分問題にされた。

そこで三井の幹部の間では仕うしても捨て、置く譯に行かず、その整理改革の筈り役を彼此人選しつゝあつたところへ藤原が歐米から歸つて來たので、これもつけの幸と、少々押しつけ氣味に、此の大役を引受けさせてしまつた。かうなると彼はまるで三井王國の煩悶引受所だ。恚うした事情の下に、三井物産の木材部改革の大任を引受けた藤原は、臺北支店長から小樽



支店長に轉任し、更に本店の木材部長を兼ねて、明治四十二年の十二月、雪の深い北海道へ渡つたものだ。

ところで木材部の北海道に於ける仕事といふのは、内地用の木材並に鐵道の枕木を始め、特に家具の製造に使用される檜材類を山奥から伐り出して、小樽、室蘭などの港から、歐米及び濠洲へ輸出するのであつて、其の取引は一面甚だハイカラなビジネスになつてゐた。

然し反面に於ては、鐵道線路から五六十里も離れた、年中熊の出るやうな山奥へ乗り込んで、荒くれ男を相手に、山小屋に二三月も立籠らなければならぬ役目があるから、由來ハイカラ黨の多い物産の社員中には、迎も勤まりかねる手合が多く、殊に専門學校出たてのホヤ／＼なぞは、木材部の實際の仕事には何一つものゝ役に立たぬといふ、情けない有様だつた。

### 一 ハイカラ黨退治

そこで藤原は、尋常一様的手段では到底整理改革の遣り遂げられぬのを見抜き、是非とも根

本的改革の大斧鉞を振ふ外はないと決心の臍をかためて、まづ以てハイカラ黨の弊風一掃にとめたものであつた。

其の頃三井物産では札幌に堂々たる木材部の事務所を有し、その建物は一ケ年の火災保険料だけでも六千圓費るといふ、贅澤極まるものだつた。内部には眞紅の絨氈を敷いたり、立派な什器を並べ立てたりして、ハイカラなオフィスには至極相當して居つても、土足で踏み込む者の多い材木屋の事務所としては、甚だ不利不便なものだつた。

藤原は「居は氣を移す」と信じた。即ち札幌のオフィスを直ちに賣り拂ひ、その一ケ年の保険料に過ぎなかつた六千圓を投じて、新たに假小屋の事務所を小樽に建設した。

而して木材部の全員に號令して、ハイカラな背廣服を嚴禁し、詰襟に草鞋履き又はゲートル巻といふ服装に一定してしまつた。無論隗よりはじめたこと云ふまでもない話で、自ら先頭に立つて山林地帯の踏査に出かけ、その途中だしぬけに同行社員達の鞆を持つて來させて、一々所持品を検査し、若しその中に西洋剃刀とかコスメチックなどいふ化粧道具を忍ばせてゐる



不心得者でもあり、當人を免職せんばかりに叱り飛ばし、徹頭徹尾ハイカラ氣分を一掃して、飽迄仕事に熱中させる主義に鞭撻した。コスメチックや西洋剃刀まで社員の手から取り上げたのは、今日から考へると少々滑稽だが、兎に角こと程左様に彼は眞剣に木材部の改革に腕を振つたもので、最初の中は當の部下は勿論其の女房連まで、寒い北海道くんだりに来てゐて、亭主の御洒落くらゐ許してくれても、旺んにブウ／＼云つたものださうだが、泣く子と地頭に勝たれず、木材部長の威光に懼れをなして、漸次その生活氣分を改めるに至り、さしも悲境に沈淪してゐた木材部の事業も、メキ／＼と擡頭し來つて、年々好成績を擧げ、本邦木材の海外輸出に一進展を齎す結果となつた。事業のコツといふものは、實に面白いところに存するものである。

更に又彼は、當時平岡樺太長官からの依囑を受けて、種々山林上の研究調査を遂げ、樺太の森林利用法として、パルプ製造工業の適當なるを發見して、之れが建築に頗るつとむるところがあつた。その結果今日に於ては殆んど樺太唯一の工業となり、歐洲大戰の際スエーデン其

他の外國産パルプの輸入が止まつても、その供給に餘り不足を感じないで通り過せたのは、之れ亦藤原の立派な仕事の一つである。

### 一 再び王子製紙へ

木材部の整理を完成してから、藤原は二度王子製紙入りを仰せつかつて、専務取締役として就任した。

時に明治四十四年の十月で、彼は前に此の會社の支配人を遣つたことがある。當時同社は業態益々悪く、大株主たる三井も流石に之には持て餘しの氣味だつた。何しろ公稱資本六百萬といふ大會社の二十五圓拂込の株券を只で呉れてやると云つても、誰も貰ひ手がなない位慘めな状態で、此の儘放任しておいては解散の外はあるまい有様だつた。

そこで此の半身不隨のボロ會社に、起死回生の大手術を施して蘇生せしむるには、三井に人を求めて、藤原銀次郎の外はあるまいといふ多方面の意見で、彼は再び見抜かれて其の整理改



革の難局に當るべく、三井幹部からの正式の推薦を受けたものである。而して當時三井の總顧問だつた故井上馨から「王子製紙の一切をお前に任せるから什麼でもいゝ、是非思ふ存分に改革してくれ」との激勵を受けたものであつたといふ。

されば藤原は先づ會社の内情を逐一精査し、この分ならば充分見込みがあると見極めをつけた上で、王子製紙を枕に討死するといふ意氣込で乗込んだ。彼は自己の全財産を投じて誰も見向き手のない王子製紙の株を出來るだけ買収し、會社と運命を共にすべく茲に背水の陣を布いて「俺は此の會社と終始するんだ」といふのを口癖のやうにして、爾來言葉通り不眠不休の奮闘をやつてのけたのだが、藤原が實業家として今日の大をなしたのは、前にも記した通り、實に此の王子製紙の運命を自己の双肩に荷つたことに由來する。

で、當時王子製紙には、從來の東京府下の王子、遠州の氣田、中部の三工場の外に、北海道の苦小牧工場が一つ殖えてゐた。その内北海道の工場は出來たばかりだつたが、然も前經營者は此の工場を拵へたために蹉跌したやうな事情になつてゐた。藤原は就任と同時に、一ト通り

各工場を觀て廻り、然る後に改革案を作つたのだが、改革案を作るに就いては、特に此の苦小牧に力を入れた。といふのは、是が當時の病源であつたからだ。

### 一 技師に教へを乞ふ

その頃苦小牧に、工場建設のために一年間の契約で米國から呼んだ一人の技師がゐた。

藤原は苦小牧を改革するに就いて先づ此の米人技師の意見を聞いた。これは今日になつて聞けば何でもないことのやうだが、當時の事情からすれば、矢張り藤原の肚が大きくないと出來ぬ業で、それは恠ういふ次第である――

苦小牧工場は、前經營者が東洋一の製紙工場を造らうと企て、米國に設計機械の一切を頼み、全部米國式に造つた工場だつた。其の工場が旨く行かぬとすれば、その罪は米國人に在る。従つてそれに改革案を訊くなどは愚の骨頂と考へ易い所だが、綿密家の藤原は然く單純には考へなかつた。物事には理外の理といふことがある、苦小牧工場は米國の設計で米國の機械を入



れた以上、それが旨く行かぬに就いては彼等に相應の言分があるに相違ない、須らく先づそれに聴くべきもの——と斷案を下して、外人技師の意見を聴いてみたのであつた。

果して米人技師にもウンと言分があつた。先づ第一は、苦小牧工場は眞個に米國の設計通りに造られてゐない、途中會社が資金難に遭遇して、肝腎なところを可なり手を抜いて拵へ上げてしまつたために、全部の能力が一致しないで、瓢箪設備に成り終つてゐる、是を直さなければ、到底豫定の成績は擧らぬ——といふ言前だつた。

成程、云はれてみると其の通りで、前工程の碎木パルプを造る所が甚だ小さくなつて居り、之に阻まれて豫定の成績が擧らずにゐたことが熟く分つた。そこで藤原は米人技師の意見に基いて苦小牧工場の改革案を作り、

「貴下の意見は至極眞實である。是非共もう一年滞在して自分を指導してくれ」と辭を低ふして云つたが、相手は、

「此の工場は單に其の設備が悪い許りでなく、働き方が全くなつてない。工場員は少しも勉強

しない。そして自分の觀るところでは、一番働く職工が安い賃銀を取つてゐて、何もしない工場員が高い給金を取つてゐる。これでは到底駄目だ。自分は然し任務を終へたから、これから直に本國に歸る」と云つて、幾ら藤原が留任を勧めても肯かず、外人流にトットと歸國してしまつた。

然し、此の米人技師と藤原との交渉は、それなりに斷絶しなかつた。藤原は其後も六つかしい問題の起る度に、書面を以て屢々彼の意見を訊いた。彼も亦喜んで是に答へて來て呉れたが、かういふことから兩者は頗る親密な間柄になつた。自然相手は其の後日本へ四五回遊びがてら遣つて來て、いつも新規の事を種々教へて歸つた。藤原が後年渡米實業團の一員として米國に行つた時など、此の米人技師は藤原を自分の自動車に乗せ、片ツ端から自國の製紙工場を案内して廻つてくれて、藤原は大いに得るところがあつたといふ話が残つてゐる。

然し、それはズツと後の話で、藤原は米人技師から苦小牧工場の改革意見を聴き、それに基づいて全工場を改革した。同時に氣田、中部の兩工場も東京府下の王子工場も改革した。これ



で以て瀕死の王子製紙が立派に立直つて来た。

彼は當時一梱の紙を賣るにも、一樽のセメントを買ふにも、總て自分の決済を得なければさ  
せぬといふ異常な綿密振りを發揮して、ビンからキリまでの社務を悉く統帥したものである。  
で、かうしたチヨイと常人の眞似がたい奮闘振りを殆んど數年間ぶつ續けて、王子製紙も大  
分好調子になつて来たのに勢ひを得て、更に樺太へパルプ工場を建設した折柄、歐洲戰亂が勃  
發して、パルプと紙價が非常な暴騰をした。これに因つて會社は大儲けをして今日の基礎を築  
きあげると同時に、彼自身もすつかりこれで資産を作つてしまつた。王子製紙が資本金五千萬  
圓、積立金一千數百萬圓といふ、名實共に我國第一の製紙會社になつたのは、全く藤原の力で、  
彼は其の後大正九年の六月に、専務から社長の椅子に就いた。

### 一 人間操縦の妙

王子製紙の成功の一面は一流外人技師の聘用で、最初の米人技師はワヅウオーツと云ふ男だ

が、これは數年前に死んだ。近年は佛蘭西の技師と獨逸の技師を毎年交互に招聘して、採長補  
短の道を講じてゐるやうだが、兎に角同社の經營法が萬事科學的で、生産能率に於て斷然他社  
の追隨を許さぬやうになつたのは、是等の外人技師に負ふ所が多いのである。

藤原は外人の利用が旨い位だから、所謂乾分を幕下に集めることも上手である。彼の配下に  
は何處の會社を引受けても立派にこなせる人間が幾人も居るが、彼の人材登用主義は全然形式  
に拘泥しない。才能があれば位置を問はずドシ／＼上へ引上げる。苦小牧工場では職工上りの  
技師が一番給金高になつてゐるやうな譯で、以てその全般を窺ひ知る可しである。

竟り彼は人の使ひ方、人間の働かし方が旨いので、此の長所を存分に發揮して、王子製紙の  
經營に成功したとも云ひ得るのである。

然らば仕うして彼が人間の使ひ上手かといふと、無論天成にもあるだらうが、その一つは彼  
自身が永い間三井の幹部から車輪に使はれて来たからである。

「使はれなければ、使ふことが出来ない」といふ平凡な眞理を、彼は完全に體得した男なのだ。



藤原は王子製紙の専務になるまでの経歴が物語つてゐる通り、何處でも誰にも重寶がられて、或る意味に於て申し分なき『三井の忠實な使用人』として押し上つて來た。然も終始難局を受けさせられながら、能くこれを切り抜けて、其度毎に自己を大きくして來たのが、彼の成功の全部だ。

従つて「柔よく剛を制す」の妙味を會得してゐること、彼の如きも尠ない。

藤原はあまり澤山の會社に關係しない。王子製紙と王子製紙の關係會社に重役たる外、電氣化學工業會社の社長をやつてゐるくらゐなものだ。それでゐて、六十有餘の會社關係を有してゐるといふ好敵手大川平三郎と比較して、財界の位置少しも下るところがないのだからちよつと愉快だ。

即ち『狭く深く』といふのをモットーにしてゐる故だらうが、兎に角一見平坦のやうでゐて、汲めば却々盡きせぬ點があるのが、彼の経歴の面白いところである。

### 財界の惑星山本条太郎

#### 一 杉浦重剛翁の玄關番

政界の山本条太郎も、三井で小僧から成功した一人である。藤原銀次郎は中上川彦次郎に見込まれて男になつたが、我が山本条氏は益田孝に認められて出世したのである。中上川、益田の両者が、いづれも三井の大先輩として双壁であること云ふまでもない。

彼は慶應三年十月十一日、恰かも徳川慶喜が大政を奉還したその月に、現在の福井市清川町の貧乏藩士の家に生れた。その年も間もなく暮れて明治維新となり、江戸は東京と改つた。而して一家は明治五年家を疊んで東京に出て來たが、彼は六ツの頑是ない悪戯盛りであつた。東京へ來て小學校を卒へてから、神田の共立學校に入つたが、當時此の學校の幹事が死んだ大岡育造で、高橋是清が英學の教師をしてゐた。



で、その頃杉浦重剛が洋行から歸つて来て、小石川傳通院の境内の或る寺に間借りをしてゐたが、彼は縁故あつて其の書生になり、天臺居士が神田の本屋へ賣りつけた翻譯の原稿料を取りに行つたりしたものである。

それから大學豫備門の試験を受けたが、試験中に大病にかゝり、醫者が「學問は止せ」と頻りに警告するので、餘儀なく方針を一變して三井物産會社に奉公することにした。時に明治十五年、彼れ十六の秋で、衣は駢に至つてゐた諸生の卵子は、前垂掛けの小僧姿に變つてしまつた。然し一身の出世は、何がスタートになるものか分らぬ。山本も矢張り最初大臣參議に志したのだらうが、そのまゝ豫備門に進んだにしても、果してどの程度青雲の志を擲み得たものか知れたものでなく。

### 一十七歳で米の買付

彼は先づ横濱支店の小僧となり、月給二圓五十錢を頂戴した。その中の一圓五十錢を賄費に

引かれ、残りの一圓を一月の小使錢に充てるといふ惨めな有様だつた。當時の小僧仲間には神戸の長谷川銕五郎や數年前に死んだ大阪の藤野龜之助などが居たが、兎に角これが彼の實業界に身を投じた初めである。

大體まア現今の給仕で、それも全然店内に住み込みだから、早朝から店の掃除などは勿論、夜は遅くまで急用の手紙や電報を一々重役の私宅まで届けねばならず、電車も何もない時代のことで、往復共に深夜テク〜歩かせられるやうなことが年中で、随分難儀な勤めであつたさうだ。

山本は横濱に一年ばかりゐたが、年ももう十六だし才走つてゐるので、東京の本店に廻されて、専ら米の係りに就いてゐた。その間に、ふとした事から早くも立身の緒口を得たのである。當時東京の米價は五圓乃至六圓の相場だつたが、政府は米の買入をなして米價の下落を防止する方針で、明治十六年の嚴冬、米穀の買入方を三井物産に命じた。

そこで三井物産では、手代の稻富といふ男が下總の小見川に出張して、米の買付中であつ



たが、俄かに本店に急用が出来て歸つて來ることになつたので、山本が代りに行つて買付けた米を受取り、それを東京へ送ると共に、向ふの米況を視察してくるといふ大任を命ぜられた。誰が此の役割を若輩の彼に命じたのか不明なのは残念だが、兎に角これは大役だと条太郎も頗る緊張し、店から渡された三千圓の金を胴巻に入れて、雲交りの晩に番傘一本で厩橋の河岸から通運丸といふ船に乗り込み、その翌日の灯ともし頃に小見川に着いた。未だ小僧だから羽織は着られず、木綿縞の筒袖に角帯を締めた姿は貧弱だったが、意気だけはもう支配人にでもなつたやうに揚々たるものがあつた。後年山本は大分偉くなつてから偶々あの邊へ銃獵に出かけゆくりなくも當年の筒袖姿を追想して一種の感に打たれたことがあるさうである。

条太郎はこれが自己の初陣の勝敗と思つたので、それこそ真劍になつて命ぜられて來た任務を遂行した。一俵の米を受取るにも、俵の兩端や真中に三四個所もサシを通して検査をし、一等級をつけるといふやうな小喧ましいことをやつてのけたから、生意氣な小僧だといふところで、相手は種々御託を並べたが、彼は飽迄嚴密な検査を何日でも頑張り通して、下總の百姓

共の尻尾を卷かせた。而して其の結果買付米は東京に着いて頗る好評を博したのだが、同時に彼が日々熱心に罫紙七八枚に書いて送つた商況の報告と買付に對する策戦計畫が、すつかり本店の連中を驚ろかした。

一 羽織を着る

元來漢學の素養を得て來てゐる上に、その頃詩文好きで一寸筆の立つた彼が、毎日大變な意氣込みで書き綴つた報告書だから、小僧として斷然異彩を放つたのは寧ろ當然で、そこで米係り主任の某が条太郎の報告書を揃へて、自慢半分に當時の社長益田孝の許に持つて行き、

「如何ですこれは……」と茶後の一話題とした。

で、小見川に滞在一月恙なく使命を果して店に歸ると、彼はその翌日直接益田社長の前に呼ばれて、遣つて來た仕事のことや一身上に就いて色々の質問を受けた。一番下つ端の小僧が親しく社長に見見されて、かやうな問答をすることは頗る異例であつたこと云ふまでもない。而



して条太郎はこれでスツカリ益田に氣に入られたとみえ、數日ならずして一躍月給七圓五十錢といふ破格の昇進をして、三井の手代見習といふことになった。當時三井の家風として、小僧は羽織を着ることを絶対に禁ぜられてゐたものだが、彼は手代見習で始めて羽織を着ることが出来たので、まるで金鶏勳章でも貰つたやうな氣がして、小躍りして喜んだ。彼はこの事に就いて『今から當時を回顧しても、あれは自分の一生中の最大愉快の瞬間だつた』とかう人に語つてゐる。

尙、翌明治十七年は竹添公使が朝鮮で袁世凱と衝突した年で、米は下落する一方なので、政府は益く米の買上げに力瘤を入れ、彼は本店から青森地方の米穀の副主任として主張を命ぜられた。さうして此の仕事にも成功して、矢張り益田の御聲がかりで手代三等となつたが、斯くの如く短日月の間に度々拔擢されて昇進するので、彼は仲間同士から羨望嫉視の的となつた。

一 隠すより現はる

かういふ譯で、彼は早くも二十歳前に出世の階梯に取り付いたが、少々調子に乗り過ぎたと云はふか、取扱つてゐる仕事に仕事だけに、その頃から米相場の味を覚えて、こつそり店の金で相場に手を出し、運よく一二年の間に三四千圓の金を儲けたが、秘すより顯るゝは早し、これが後に曝れて、彼の出世に一頓挫を來すことになつた。

——明治十九年の夏、時の政府は薩長軋轢の結果、例の有名な開拓使拂下げ事件を起した。

これは今の北海道の官業全部を拂下げるといふ問題で、その爲であらうか、當時の内務卿山縣有朋、外務卿井上馨など長閑の兩巨頭相携へ、有力な實業家四五名も加つて、北海道の視察に赴いた。そこで三井からも益田孝、馬越恭平の兩名が此の一行に加はり、条太郎は青森に居る關係で特にその隨行を命ぜられた。彼が親玉の益田に接近するには千載の好機だつた。彼は益田の御氣嫌を取り結ぶと共に、他にも二三附いて行つた社内の上役に對して、調子のいゝところを出來得る限り發揮した。その結果、一ヶ月の旅を無事に歸京して、これ等重役の旅費を精算した時に、彼の一行に立替へた金が數百圓に昇つたことが分明了。時の會計課長



は誰であつたか、兎に角頭腦の働きのあつた男だつたと見えて、月給十五圓の手代が此の大金を立替へるとは、コリヤ臭いと睨んだ。それから彼の日常を表裏さまざまに調べてみた結果、内所で相場をやつてゐたことが全部曝れて來た。別に費ひ込みになつてゐたわけではないが、仕うも切れ過ぎる、危険な奴だ——といふので、懲罰の意味で米の係を罷めさせられ、會社の石炭運送船頼朝丸といふ千二百噸ばかりの汽船に荷物係りとして乗込ませられた。彼は自業自得と諦めて、有難くない海上勤務に就いたが、此の船の高級船員は全部英國人で、火夫、ボーイなどはみんな支那人だし、日本人の事務員はたつた彼一人だつた。このため、彼が共立學校當時高橋是清から習つた語學位では、一切用が辨じないので大いに閉口した。ところで、船長のゴールといふ英人がヤング・ヤマモトの境遇に同情して、彼を我が子のやうに扱ひ、萬事面倒見てくれたので、いつの間にかやうに差支なく英語を話せるやうになり、海上勤務にも興味を持てるやうになつた。山本本人に云はせると「今から考へれば、あの懲罰が自分には却つて大きな賜物だつた」さうだから、人間萬事塞翁の馬かも知れない。

## 一 軍事探偵

かくして、頼朝丸は僅か千二百噸の小舟ではあつたが、當時はそれで天津、香港等の遠洋航海をなし、その間幾度も沈没し損なつて、一年ばかりの後たうとう揚子江の河口でひつ繰り反り、上海で修繕することになつた。

然し、これが却つて彼の運の向き直りに成つたのである。當時三井物産上海の支店長は上田安三郎といふ男で、一席會談の折、「いつまで君のやうな男が船に乗つてゐても仕方があるまい。陸上勤務になるやう口をきかう」といふことになつて、上田の斡旋で彼は上海支店詰になつた。

後に矢張り三井で幅を利かせた福井菊三郎、藤瀬政次郎などといふ連中も、當時は同じく月給二十圓の仲間だつた。彼等は金さへあれば一緒に遊び廻つたもので、山本が船を下りた時外套を二枚持つてゐるのを見つけて、早速その一枚は強制的に賣り飛ばさせ、一夕の親睦費に充



てたなどといふ珍談が残つてゐる。

で、帝國議會が最初に開かれた明治二十三年、三井は初めて満州の大豆事業に着手した。そのため彼は選ばれて唯一人營口の出張員になつたが、當時營口は固より、満州全土で日本人といへば二十四歳の彼一人だつた。領事なども英國のバンデネルが日本の名譽領事をしてゐたから、日本と満州の關係は極めて未だ空漠たるものだつた。彼は満州人の家に間借して支那服を着込み、辮髮で熱心に取引に従事したが、このために満州大豆の大口の取引が開けて來て、後年盛んに歐洲へ輸出するまでになつたのである。従つて爾來、永の勘氣を蒙つてゐた彼も三井から眞面目に遇されるやうになり、明治二十七八年の日清戰役當時には、上海の支店長代理を勤めて、支店長の内地へ歸つてゐた留守中、全責任を負ふて三井の満州方面の事業を一人で切つて廻した。

而して宣戰と同時に日々危険が身に迫つて來たが、彼は本店から強制的に引揚げを命ぜられてゐたに拘はらず、女小供だけを内地に送り還して、自分は強壯な部下と共に飽迄支店に踏み

止まり、軍用品の買入をしたり、陸海軍から頼まれて軍事探偵をやつたりして、血氣に任せて旺んに活躍した。

併し、日を経るに従ひ、支店は支那の刑事に包圍されて、事實上仕事をすることが出来なくなつたので、もう愈々といふ時になつて漸く上海を引揚げ、佛蘭西の郵船に乗つて河口の烏蘇砲臺を通過すると、果然、獨逸の指揮官の下に、支那軍の停船命令を受けた。彼の鞆の一つには威海衛の水雷敷設の圖面や秘密の地圖が一抔積め込んであつたので、見つかつたらら最後と、内心甚だビク／＼ものだつたが、幸ひ佛蘭西の船長が頑強に客室の臨檢を拒んでくれたので、眞に虎口を逃れ、現在の海軍大將當時の黒井大尉などと、互ひの首の無事であつたことを祝つて、船中で大いに飲んだ憶ひ出があるさうである。

一生々々流轉

満州にさういふ特殊の因縁があるので、彼は一度内地に歸つてから、戰時中の狀況を視察



するために再度渡満を企てたが、却々政府筋でも許してくれぬ。そこで時の内閣書記官長伊東巳代治を口説いて、内閣通信員といふ妙な役目を拵へて貰つて、占領地の視察に出かけ、威海衛の攻撃、大平山の戦鬪に従軍して、二十八年の三月營口に到着した。而して當時の司令官から住民操縦の一役を買はせられ、英國の官憲と守備隊との間に大衝突のあつたのを居中調停したりして『山本、山本』と満州方面に更に男を賣つた。

で、馬關條約の結果、初めて支那の居留地に於て外國人が工業を営む權利を得たので、日本で第一の企業したのが上海紡績會社だつたが、山本はその創立の樞機に參劃して支配人になつた。此の會社は中途で鐘紡に合併したが、合併後彼はそつちの手を引いて、露西亞人の經營してゐた紡績工場を買収し、一時全く獨力で日本の法律の下に經營した。これが後にまた三井の手に移り、現在では一千萬圓の會社になつて盛んに營業してゐる。

明治三十年即ち彼の三十一の時、内地へ歸つて本社の棉花部長となり、大阪に行つた當時は恰かも紡績界の恐惶來時代で、綿代の貸金を整理するために八つばかりの會社の重役となり、

更に整理のために山本紡績を起し、又各會社の合同を計劃した。九州紡績、合同紡績會社等は皆その當時に出來たものである。

かうして仕事都合よく進んだので、彼は明治三十三年初めて歐米視察に出かけた。ところが留守中、九州紡績の支配人守山又三が大相場を試みて内部の遣り繰りが付かなくなつたため、時の社長故野田卯太郎が大いに氣を揉んで、あの布袋腹が二寸も凹んだといふ騒ぎが持ち上つた。然も守山の黒幕には彼が控えてゐて、種々畫策したものと喧傳され、彼は歸朝早々株主から短刀で強迫されるやら大分酷い目に遭つた。何しろ山本が横濱に着くと、本店から留守宅に待命の通知書が來てゐたといふやうな始末で、まるで罪人扱ひにされたものだが、満更さういふ筋でもなく、その間に私利私慾を計つたことがないといふことが明らかになつて、『山本も可哀相だ』といふことで却つて榮轉して本部參事長といふものになつた。

併し此のため、大分持つてゐた同社株が暴落してそちこちの借金も拂へず、債鬼門に満つといふ有様で、一時細君を里に預けることにしたりして、漸く四苦八苦を切り抜けたが、この失



策が大いに薬になり、山本自身の經濟方針に一轉化を來すことになつた。

### 一 シーメンス事件

動いて止むことを知らぬ彼は、小壯三井の參事長となつて早くも社内の制度の改革に目をつけた。彼は三井物産の組織を根本的に改正する必要があると信じて、三井の總顧問たる雷親翁の井上馨に進言し、その實行を目論んだのが、圖らずも重役連中の耳に入つて、直ぐに上海支店長に追ッ拂はれた。山本たる者、此の計劃の頓挫と左遷が癢に障つて耐らず、飽迄自分の主張を頑張つてみせ、とどの竟り辭表を叩きつけて一月ばかり旅行に出でしまつたが、いろ／＼先輩に説得されて、三十四年に再び上海の土を踏むことになつた。

此の時山本がそのまゝ物産を罷めてしまへば、恐らく早く政界にでも出たことだらうと想像されるが、さういふわけでスグ又三井の人間となり、明治三十七八年の日露戦争の際には、上海に居て商賣以外に所謂國事に奔走して勳章を貰ひ、會社の業務も三四年間に約十倍ばかり擴

張して、利益も支店中第一位を占める好成绩を挙げたので、支那各支店の總監督となり、且つ理事心得となつて三井の重役の末班に列することとなつた。

彼が前後上海にゐた間の仕事の中では、日本人として紡績に先鞭をつけたのと、親戚の原亮三郎と計つて、支那の教科書の編纂及び出版事業を始めたのが特筆大書に價する。

これは最初支那人と共同して十萬ドルばかりの資本で始めたものだが、後に有名な商務印書館となつて、現在では支那出版界の覇者としてその資本金も五百萬ドルとなり、北京政府發行の教科書を凌駕するやうな勢力を得てゐるのは、彼としても快心事であらう。

で、前後十八年間支那各地に在住して、明治四十一年本店に歸り、四十二年物産が其の組織を變更して株式會社となるや、彼は擧げられて常務取締役となつたが、矢張り支那方面を擔當し、孫文一派に軍資金三百五十萬圓を調達したりして、實業家といふよりもソロ／＼政治家色を濃厚に發揮して來たが、同四十三年例のシーメンス事件に連座し、結局無罪の宣告は受けたが、責を引いて大正三年永の三井物産を辭してしまつた。



一 彼の政界入り

三井は去つたが、その後も紡績、船舶、水力電気、鑛山と、相不幾種々な事業に關係して財界の一惑星として活動して來た一方、大正九年以來郷里の福井縣第一區から毎回代議士に當選して、所謂政友會第二期の大幹事長から總務を勤め上げ、昭和二年の田中内閣には滿鐵社長として多年の蘊蓄を傾向け、いろ／＼向ふに仕事も残して來たが、「大臣になる、なる」と云はれて、たうとうならずじまひに終つたのは、寧ろ山本の案外綺麗な肌合たる所以かも知れない。

故田中義一はよく人に向つて、

「山本は俺の分身だ」と最高級の信用状をつけたさうだが、田中式ニコボンとして多少の割引をせねばならぬとしても、混濁せる政界人中比較的山条に信用の置けた證明くらゐにはなる。山本の出世の階梯は才氣と智略、熱と力だが、「三井の使用人」として兎角切れる切れるで仕事の荒つぽかつた彼も、結局政界入りで納つた貌のあるのは、本人のため幸慶である。

蚊遣り線香の安住伊三郎

一 主家の破産

「蚊とり線香」で賣り出した大阪の安住大藥房主安住伊三郎は、作州津山に近い八頭郡那岐村の産、若い頃土地の造り酒屋に奉公して實體に働いてゐた。然るに其の家の主人といふのが大變な大酒呑みで、しんしょうありたけ飲み潰してしまはふといふ男だつたから、家運も日々に傾向いて、もう明日にも店も住居も人手に渡さねばならぬ破目になつた。

そこで他の奉公人達はサツサと暇を取つて、互ひの身の振り方を急いだものだが、伊三郎だけは主家の悲運を口惜しく感じて、相不變黙々と働いてゐた。

ある日、お内儀さんは伊三郎がせつせと酒樽を洗つてゐるのを、じつと視てゐたが、「伊三郎や、お前はほんたうによく働いておくれたね。何といつてお禮を言つていゝか……」



「またお内儀さんが、そんな事を云つて。私に甲斐性のないため、お店も面白くゆきませんで……」

「お前のその志は有難いが、もうお前にも今日から働いては貰へなくなりました……」と云つて、杖を眼に當てた。

「えー それでは……？」と云つて、伊三郎ぐつと胸を騒がした。

「お察しでもあらうが、いよく明日、残らず人手に渡ることになりました。それで杖とも柱とも頼むお前にまで暇を出さなきゃならない仕儀……」

「お察しします」とガツクリ彼は面を垂れた。

「暖簾を別けるどころか、お給金さへ碌々上げないで、着のみ着のまゝで出ていつてくれと言ふのは、もうよくくの事だが、どうぞ怨まないでおくれ。お前のことだから何處か好い奉公口もあらうから、不運な家に奉公したと諦めて、まア折角精出して出世をしておくれ。私達も蔭ながらそれを祈りますよ」

伊三郎は自分の身の振方より、主家の前途が案ぜられた。

「お内儀さん、それでは旦那をはじめお前さん方は、どうなさるお心算なんです？」

### 一 主家を思ふ一念

内儀の涙ながらの話によると、家屋敷だけは全部渡してしまふ代りに、やつと債権者に泣きついて、倉の酒を百石だけ残して貰ふことになつたので、その酒を資本に津山の町へでも出て、小さな居酒屋でも始めようといふのである。

「併しそれだつて、長く續きはしないよ。一日お酒浸りの人だから、小さい居酒屋の一つぐらゐ、お客のつかない内に、飲みつぶしてしまふに定つてます」と心もとなげな言葉。

「さうなつたら、どうなさいます？」

「どうするつて、親子三人が路頭に迷ふばかりぢやないか」と、云つたものの、胸に思ひが迫つたとみえて、涙がいつばい眼に溜つてゐる。主人夫婦には妙齡の娘が一人あつた。



伊三郎も暗然となつて、眼をしばたゝいてゐたが、

「だが、百石の酒が残るんなら、どうにかなるには違ひないが……お内儀さん、こりやどうしても旦那に酒をやめていただくんですねえ」

「みんな無くなれば、仕方なくお酒もやむだらうよ。だがねえ伊三郎、妾は居酒屋でもなんでも、つくづく此のお酒を賣る商賣がいやになつたよ。家ばかりぢやアない。どこだつてお酒のために失敗するんだからねえ」

お内儀さんの愚痴を何かぼんやり聞いてゐた伊三郎は、ハツと此の時心に思ひ當つたものがあつた。

「さうだ！ 酒屋では駄目だ。こいつが間違つてゐた。何故こんな分り切つたことに気が付かねえでゐたんだらう？ これは仕うしても、他の商賣を始めにやあ此の家は立つまい」

伊三郎にしてみても、これまでは此の商賣に年期を入れて、行先暖簾を分けて貰ふつもりだつたが、主家の没落を眼のあたりに見て、酒屋ばかりに日の照るわけでないのを感じた。

「お内儀さん、いゝ事がある！」と突然彼は云つた。

「好い事つて、何です伊三郎」と不覺乗り出した内儀に、

「津山などへ出るより、いつそ百石の酒をお金にかへて、大阪あたりに行つて、何か別な商賣を始めるんです……此の間も旦那が、金があつたら一つ大阪へでも行つて、株で一當したいとかう云つてゐなすつたから、必ず同意をなさいませ」

「そりや同意をするだらうが、今の風では、折角のお金を相場ですつてしまふのが落ちだらうよ」

「いや、そんなことは旦那にさせない。私にも考へがあります」

「それぢやお前、暇を取らないで、大阪までも附いて行つてくれるのかい？」

「行きますよ。私は何としても今一度御家の繁昌するまでは、骨身を惜まず働いてみたいんで……」

「まア有難いねえ、他の奉公人達はみんな逃げるやうに暇を取つて行つちまつたのに、お前だ



けがどこまでも、さうして忠義立をしてくれる。伊三郎、實は妾もお前をどんなに頼りにしてゐたか知れないんだよ」

### 一 酒諸共に難破

伊三郎には深い決心があつた——

眞面目に骨身を碎いて働いたら、人の多い大阪のことだから、三人や四人の命が樂につないで行けぬ道理はない、それには先づ向ふで、何か目先の變つた新しい商賣をやるに限る——とかう彼は考へてゐた。

そこで、お内儀さんが主人にその話をする、主人は二つ返事で大阪行に賛成した。

それから種々相談の結果、伊三郎がまづ先發隊として、百石の酒を積み込んで大阪へ行き、酒を金に換へて、兎も角も店舗を一軒借りた上、親子三人を迎へに戻るといふ事に話がきまつた。何を商賣するかは、萬事向ふに行つてみての事になつた。伊三郎には、何事か

深く胸にひそめてゐる容子が見えたが、別にこれと口に出して自分の計畫を話さうともせず、そのまゝ其の翌朝、百石の酒を高瀬船に積み込んで、那岐山下の菩提寺の曉の鐘に送られながら西大寺港へと下つて行つた。

かうして彼が大阪へ發つてから、早くも日數が流れて、もう疾うに迎へに來なければならぬ時分になつたが、大阪からは葉書一枚届かなかつた。

女だけに、お内儀さんの方が先に氣を揉み出したが、大腹な主人はただ苦りきつた顔をしなから盃を嘗めてゐた。そのうちに、事情を云つて明け渡しを延ばしてゐた家も、愈々明日は最後の期限といふことになつた。

夫婦は「あんな實直らしい様子はしてゐたが、未だ獨身者、大金を握つたのに氣が變つて、どこぞへ逃げたものに違ひない」ともう定めてしまつた。尤も主人の方は、まだ一縷の望みを持つてゐるらしい容子だつたが——

で、その晩、親子三人夜の更けるのも知らないで、とつおいつ思案にくれてゐた。翌日旨く



申し譯が立、なければ、住み馴れた此の家も此宵限りになるかも知れぬと思ふと、おちく目も合はなかつた。親子は遂々床の中で、まんぢりともせず夜を明かしてしまつたが、ところへ、ひよつくり伊三郎が歸つて來た。

「オ、お前！」と親子三人飛びつくやうに出迎へた。

「いや、どうも遅くなりまして……」と伊三郎は詫言を云つたが、未だ座るか座らぬ先に、

「旦那、大變な事が出來ました」と申し譯のないやうな顔をした。

「何に、どうしたと?!」と道がの主人も顔色を變へた。

「實は……」としばらく云ひ淀んでゐたが、夫婦にせき立てられて、彼の打ち明かしたところに憑ると、行きがけ播磨灘でひどい暴風雨に遭つたため、たうとう船は暗礁に乗り上げて、人も酒もみんな沈んでしまひ、自分も一度海中に沈んだが、やつこのことで命だけ助けられたといふのである——

聞いた親子は、全く開いた口が塞がらなかつた。

## 一 嘘も方便

「旦那、さういふ譯で、のめく歸れた義理ではございませませんが、實は私も一度は助けられず、にそのまゝ死なうとまで思ひました。併しそれでは何にもならぬと考へ直して、兎も角も大阪まで迎りつき、島屋さん(大阪の取引先)に残つてゐたお店の勘定を拂つて貰つて、それでやつと小さいながら、商店を一軒借りておきました……それから何かいゝ商賣はないかと、二日三晩、夜も眠らずに考へたところ、どうやらものになりさうなものを思ひつきました」

「それでも、まア好かつた。で、何を思ひついたのでえ？」とお内儀さんが眞先に口を開いた。

「薄荷パイプといふものなんですがね」

「薄荷パイプ！」と親娘三人、奇異の眼をみはつた。

「兎も角、見本をこしらへさせて、盛り場で自分で賣つてみたんです」

「賣れたか？」と主人。



「賣れましたね。珍しいせゐもありませうが、それこそ飛ぶやうに賣れましたよ。それですつかり力がつきましたので、お酒を洗めたことは申し譯ありませんが、一先づかうしてお迎ひに戻りましたやうなわけで……」

夫婦は大分氣持を取り直して喜んだ。

「伊三郎、却つてお前に苦勞をかけた。よく不運を取り返して來たな」と口の重い主人がこんなことを云つて、

「これから先はお前だよりだ。サア、前祝ひにいつばいやらう」とばかり、又も盃を持ち出して、盛んに景氣をつけてゐたが、やがて酒樽でも投げ出したやうに、横になるとグウ／＼睡つてしまつた。

と見た伊三郎は、母子の側ににぢり寄つて、

「御安心なさい。お酒は無事に大阪へ持つて行つて賣りました」と意外な言葉。

「え?!」と二度ビツクリしたお内儀さんを押へて、

「静かに、そのお金はこゝにあります。家を借りた方は、まったく掛け金で間に合ひましたから、これはお内儀さんがしまつておいて下さい」と胴巻を取り出して押しやつた。

「まアお前!……」と驚きは更に感激に變つた。

「あゝ申さない、旦那の相場を封じる道がなかつたんで……御心配をさせてすみません」と伊三郎はニコ／＼しながら、さう云つた。

### 一 新發明の薄荷パイプ

翌る日、主従四人は新しい希望に燃えながら大阪へと志した。

伊三郎は大阪へつくと、旅の疲れもいとはず、すぐに盛り場の露店に立つた。

「サア御立會の諸君、これは新發明の薄荷パイプ! 煙草と違つて有益無害、好きな煙草がひとりでにやまつて、頭腦は明晰、精神爽快、煙草代用にもなれば、胃の大毒甘いお菓子の代りにもならうといふ品物だ。どなたも一本、御婦人方でも小供衆でも、老人はもとより青年諸君



は尙更のこと、誰れが喫つてもおいしくて爲になる衛生薄荷パイプはこれ！」と鳥取訛りを臆せず、喋舌り立てた。伊三郎はこれを賣るため他のテキ屋に聞いて、漢文口調をまぜるのに苦心した。品物が品物だけに、付うしてもさういふ調子を入れないと具合が悪い。品物も珍らしかつたが、此の調子がまた馬鹿に受けて、チキに周囲は人の黒山を築き、子供迄が、「え、これは新發明の薄荷パイプ！」と口眞似をするほど、大阪中の大評判になつた。

間もなく自分は大道に立たずとも、澤山の賣子を使つて、市内中で賣れるやうになり、一方またどしどし普通の店に卸して、一時は全く飛ぶやうに全國に出た。今でもまだ時々大道で見受けることのあるのは、讀者諸君も御氣附きだらう。

兎に角これと思ひがけないほどの軍資金を得たので、伊三郎は更に眼ぐすり、のみとり粉と、大道でも普通の店でも賣れるやうな品を矢つぎ早に考案して、いづれも面白いくらゐに賣り廣めた。さうして、「蚊とり線香」でスツカリ當てちまつたのだが、抑々の初め、薄荷パイプで賣り出したことは、東京の人はあまり多く知るまい。

田舎の伊

「安住の蚊とり線香」は今日では遠く海外まで輸出され、安住大藥房の創設者として、安住伊三郎の名は誰知らぬ者もないやうになつたが、その成功の端緒は、かゝる零細の苦心から出發してゐるのである。

因みに彼の細君は、かうした因縁で結びついた、主家の一人娘であつたことを讀者諸君の前に知らしておく。

### 自動車王フォード

#### 一 「機 械 虫」

自動車王ヘンリー・フォード傳は近頃讀書界でも少々食傷の氣味だから、茲にはなる可く傳記的色彩を避けて、本書の使命通り成功の端緒、出世の階梯に力を入れて行くことにしよう。然し、どうしても前後に彼の生立と成功の總量を、ザツと記す必要がある。



先づフォードは今から六十六年前の一八六三年の七月、米國ミシガン州ディアボーンの片田舎に生れてゐる。立志傳的に書けば水呑み百姓の俸とでもしなければ感じが強くないやうだが、彼の家には三百エーカーばかりの農園があつた。三百エーカーと云へば日本の百二十町歩に相當するから、貧農の子でなかつたことは確かである。

但し彼の成功は、その親の財産などの力は毛頭借らず、全く赤手空拳でやり上げたのだから貧家に生れたのと少しも變りはない。

フォードは學校を出て暫く自家の農園の手傳ひをして暮してゐたが、何うしたものか彼は不思議に小供の頃から機械といふものが好きで、堪らなかつた。機械のことを考へはじめると寢食も忘れるほどで、周囲の者から「機械蟲」といふ綽名をつけられてゐた。

で、フォードはとうとう堪らなくなつて親の家を飛び出し、デトロイト市のフラワー蒸汽汽罐會社の職工になつた。然し俸給は一週タツタ二弗五十仙で、どう獨身者で節約しても食へなかつたから、彼は夜は夜で、一週二弗の約束で或る寶石商の家に働いてゐた。會社の方は十

時間労働、寶石商のは夜の七時から十二時近くまで働くのだから、毎日十五時間の勤務、意氣地のない者には時間だけでも堪へられない苦痛だらうが、機械に關する知識慾と生活の向上心に燃えてゐたフォードは、苦痛は苦痛なりに我慢が出来た。

### 一 初めて知る「自動車」

あらゆる機械に對する知識慾の衝動から、彼は更に乾ドック機關工場の職工になつた。そこでも最初は一週二弗五十仙だつたが、機關工として充分モウ腕が出来てゐたのと、職工として稀らしい人間だといふので、彼は工場主から信用されて間もなく五弗の週給に増額された。一週五弗あればどうにか食つて行けたから、彼は夜間を充分自分の研究時間に利用することが出来た。

さうして機械に關する努力的な研究を續けてゐるうちに、彼は家庭の事情で已むなく郷里のディアボーンに歸らなければならぬことになつた。然し郷里に歸つてゐれば、終日働かねば食



へぬといふ境涯でなかつたから、寧ろ靜かに好む道を研究する上に好都合だつた。彼は農園生活の間に機械に關する雑誌や書籍をウンと買込んで勉強した。これは全くの貧乏人の子では恵まれない幸福であつたと言へる。

で、或る日彼は機械雑誌を讀んでるうちに、フランスで自動車といふものが發明されたといふ記事を見つけた。尤も自動車といつても今日のやうな完璧な車體でなく、極めて幼稚なものであつたことは言ふまでもない。

自動車の發明

これが然し、どのくらゐ彼の心を刺戟したか知れなかつた。自動車に就いては、彼も全然考へないのではなかつた。馬などの力も藉らず、特殊の機械装置によつて、汽船が海上を自由に走るやうに、道路を自由に迅速に、馳驅することの出来る乗物、それは汽車のやうにあんな大きな、さうして軌道が必要とするものでなく、もつと輕便に自由自在に道路を操縦し得るものでなくてはならない。然ういふ便利な文明的乗物は既に世界の人々の心の奥に要求されてゐる——と、かういふ時代的要求から、フォード自身もその機械に就いて、漢

然とながら腦裡に描いてゐたものがあつたのである。

然し此の發明記事を讀むまで、フォードが當時理想としてゐたのは、時計の大量生産事業であつたといふ。彼は生活必需品として世界的市場を持つてゐる時計の値段をもつとズツと安くして、小供でも持つてゐるやうにしたいといふ一の理想を抱いてゐた。即ち大規模の時計工場を設け大量生産主義によつて、一日千個くらゐを製造し、原價一個三十七仙、これに三仙の利益を見て四十仙で市場に賣れる時計を作れば、需要は必ず從來の數十倍數百倍に増加して、生産者は個々の利益は少いにしても、大量生産の結果却つて大なる利益が得られて一舉兩得であるといふ見地だつた。此の意見には大分共鳴者があつて、彼は乾ドック機關工場にゐた頃から、専ら其の事の實現のみに腐心してゐたくらゐである。兎に角此の考へ方は、最初からフォード流の大量生産主義の特色が現はれてゐて面白いから特に記しておく。

ところで、彼は自動車發明の記事を讀んでコロリと氣が變つた。從來の時計事業の理想を弊履の如く擲つて、自動車の完成に一轉した。尤も此の仕事は自分でも考へてゐたことだから、



所謂不見轉に方針を變へたのではない。此の心機一轉は相當力強い確實性を帯びたものであつた。

## 一 自動車の發明

彼は自分の腦裡に畫いてゐた考案によつて、早速設計から製作に取りかかり、數ヶ月デИАボーンの農園に立籠つた。彼は此の時、動力としてガソリンを使用することに思ひ及んでゐた。

で、設計から製作へかゝつて彼は礎と難關にブツかつた。其は電気知識とガソリン使用法とが、未だ實地の役に立たないほど不十分な點だつた。彼は斷然製作を中止し、電気とガソリン使用の知識を得べく、デトロイト市のエデソン電光電力會社の工場技手として傭はれ、月給四十五弗を貰つた。或る日石油發動機關が工場に据付けられたが、未だ誰も見たことのない代物だつたので、どうして運轉させるものか技師連中でも知る者がなく、譯の分らぬ怪物として

持餘したところ、フォードがものゝ見事にこれを運轉させたので、彼は忽ち會社の信用を得て俸給は一足飛びに月百五十弗に昇給し、會社本部の機械部監督に拔擢された。

これで生活にも多少の餘裕が出来たので、彼は自分の家を見て、結婚して家庭を作つた。而して會社勤務の餘暇は、ガソリン機關の研究に熱中した。彼は住宅の一部を作業場とし、毎夜二時三時まで其處に立籠つて機械油臭くなつたが、どうかするとそのまゝ徹夜することも珍らしくなかつた。

かうして彼のガソリン機關も出来上り、自動車が出来た。彼は早速自分でそれに乗つて往來で試運轉をやつたが、遺憾ながら未だ到底實用に適さなかつた。速力も極めて鈍いし、前進は出来ても掛を向け直して後歸りをする事が出来なかつた。彼は車體を向け直すために非常な骨折りをして、漸く自分の作業場に戻つた。ハンドルの捻り方一つでどうにもなる今日の進歩した自動車から思へば、寧ろ滑稽なくらゐだが、そんな乗物のなかつた時代に、兎も角も自分の自動車を發明することに成功したフォードの喜びは滑稽どころの沙汰でなかつた。彼は試



運轉に於て、豫期通りガソリン機關で自動させることの出來た事實によつて、近き將來完全な交通機關とすることは最早問題でないと思つた。

### 一 資本を求めざる苦心

此處まで成功した彼は、最早片手間の研究はならずと考へ、エヂソン電光電力會社の技師の地位と俸給とを擲ち、自動車完成に一路邁進して心血を注いだ。而して晝夜間斷なき苦心の結果は空しからず、彼の目的とした理想の自動車は完成した。それは彼が研究を思ひ立つてから八年目だつた。フォードが單なる發明家だとすると、これで成功の一段落がついたことになる。然し、彼は發明者といふよりも更に事業家だつた。エヂソンがより發明家であるに比較して、フォードはより實業家であつた。

で、その頃はもう方々で自動車が製作されるやうになつてゐたけれども、いづれも佛蘭西式のもので製作に莫大な費用を要し、車體も大型で頗る高價、到底一般の人たちが實用品として

買へる程度のもでなかつた。云はゞブルジョアの贅澤心を満足させる以外には、殆んど用をなさなかつた。ところがフォードの目的とするところは、最初からより製作費のかゝらぬ、より實用的な、より優秀な自動車を社會に提供することにあつて、恰かも彼の手によつて完成した自動車が此の資格を具備してゐたから、彼は自動車が方々に出來て珍らしいものでなくなつてゐたからといつて、聊かも失望落膽することなく、却つてそれは自分の自動車の實用的價値を證明するに都合だと思つた。

斯くて彼は愈々大規模の製造に取り掛るべく決心したが、それには當然相當の資本を要する。彼は出資者を求めたが、彼の自動車が佛蘭西製のものに比べて小型で貧弱に見えるところから馬鹿にし切つて資本家共が相手にしてくれない。これには流石のフォードも弱つた。彼の期待では、恐らく世間の資本家は、先を争つて出資をしようと云ふだらうに考へてゐたのだが、實際は彼の期待を悉く裏切つて、てんで問題にして呉れなかつた。そこで彼は何とかして自分の自動車の優秀なことを世間に認めさせ、資本家を競争的に出資させる方法は無いか



と智慧をしぼつた。

すると、旨い思案がフォードの胸に浮かんで来た。それは自動車競走をすることだ。

### 一 自動車大競走

其頃丁度アレキサンダー・ウイントンといふ男が、佛蘭西製の自動車に改良を加へた製作をやつてゐたが、フォードはこれに自動車競走を申込んだ。

ウイントンの方ではフォードの自動車を見て『こんな玩具みたいなものとは競走するまでもなく、こつちの勝にきまつてゐるが、折角相手の申込みだから、まあ遣つてやらう。勝てば廣告にもなるから』と多寡を括つて申込みに応じた。これは當のウイントンばかりでなく、兩者の自動車を見た者は誰でもさう思つた。ウイントンの自動車は元來が佛蘭西式を採つた大型だから、見るからに堂々としてゐたが、フォードのは小型で實用的に出来てはゐるが、一見甚だ貧弱である。これではまるで問題にならない、此の競走は見なくても結果は分つてゐるとしか

思はれなかつた。併し、この自動車競争は『ライオンと兎の競走』みたいな面白い對照なので、デトロイト市民は非常な興味に唆られ、仕事を休んでまで續々見物に詰め蒐けて来た。

さていよいよ競走が始まつてみると、ウイントンと見物一同の豫斷は、素晴らしく裏切られた。敗けることの必然を豫想されたフォードの小型自動車は、大象の如きウイントンの自動車を、見る間に苦もなく走り抜き、問題にならぬ大差を以てフォードの勝利に歸した。フォードの此の時の得意は想ふべしであつた。

而してフォードが豫想したやうに、果然彼の周圍にはデトロイトの資本家達が資金提供の話を持ち出して来た。彼等の多くは、發明家を喰物にする貪婪な狼だつた。彼はこれ等の狼たちと輕卒に握手をしなかつた。此の邊にフォードが自ら事業家として大きく伸びた確乎たる面目がある。すると茲に、矢張りデトロイト市にゼームス・クーゼンといふ商人があつた。此の男は却々肚の出来た人間で、フォードの處へ遣つて来て四シリンダー付八馬力の自動車一臺を注文し、其の他いろ／＼好意を示したが、別に野心がましい條件は氣ぶりにも見せなかつた。フ







がすぐ現はれて来た。それは曩に自動車競走でフォードの名を揚げさせたゼームス・クーゼンで、彼は一時フォードから離れてゐたが、フォードがデトロイトの有力な資本家達と手の切れたのを見るや、彼に同情して自分の全財産を投げ出さうといふことになつた。もう一人ウィルスといふ男が、クーゼンと同様フォードの味方となつて、これも資産全部を投資することになり、二人の資産によつて資本金五萬弗一萬四千弗拂込の小會社を起し、フォードを援助することになつた。フォードに取つては此の二人の援助者は、資力に於ては極めて貧弱なものだつたが、眞に理解ある味方として、所謂大資本家達から百萬弗出資して貰つたより、遙かに心強く嬉しかつたと云はれてゐる。

### 一 大危機に襲はる

實際一萬四千弗拂込の會社では、自動車製造業としては小規模も小規模、そこらの鍛冶屋に毛の生えたやうなものに過ぎなかつた。然も一臺の製作費に數百弗を要する仕事だから、職工

なども無論充分に雇入れることが出来ず、僅か二人の熟練な職工を使い、自分も職工と一緒になつて働いた。併し此の二人の職工は、フォードの潔白な性格と超人的努力とに感激して、彼と共に朝早くから夜も十一時十二時まで懸命になつて働いてくれた。

天は自ら助くる者を助く——二人の忠實な職工を相手に死物狂ひとなつた日夜の努力は、彼の前途を忽ち明るくした。優秀で堅牢で然も安價なフォード型自動車は、日を逐ふて眞價と需要を高め、數ヶ月にして四五十人の職工を使用するほどに發展し、最早彼の前途は無難に發展の一路を直進するかに見えた。

ところが其の年の暮になつて、仕うしたわけかバツタリ自動車の賣行が止つた。當時彼の自動車は他の自動車の半額乃至三分の一の九百弗といふ安價だつたから、その利益も微々たるもので、逆も會社に資金の餘裕などのあらう筈がなく、一度賣行が止つてみると、忽ち百人近くの職工にどう支拂ふべきかの貸銀問題に直面した。彼自身には一弗の貯へもなし、クーゼン、ウィルスにしても全財産を投げ出してゐるから其の上出す金がない。銀行其他から借金をする目



當もなし、正に八方塞りであつた。他の月と違つてクリスマスを眼の前に控えた年末だから、賃銀目當の職工に金を支拂へないとあつては多くの職工達を殺すやうなものだ。此の難關には流石のフォードも悶え苦しんだ。

フォードが卓越した勞資主義者として、世間並の成功者と少しく其の資本家的氣質を異にしてゐるのは、今日あまねく世界中に知られてゐる事實である。従つて事業家として立つた當初に於て、かうした問題を眞剣に苦しんだことは想像に餘りある。

然し、結果はどうにもならなかつた。フォードは遂に決心した。彼等職工達の前に一切を投げ出し、然も彼等の同情と諒解を得ることが出来なければ仕方がない。一時會社を解散しても全ての解決をつけ、而して自分は更に再起を企てるまでだ——とかう決意して、職工一同に會社の状態を赤裸々に打明け、同時に將來に對する發展的確信を披瀝した。ところが、案ずるより産むが易しといふか、彼の平素の誠實と熱心に心服してゐた職工達は、誰一人彼の許を去らうといふものはなく、會社の事情に同情して、彼と共に最後まで働かうと誓つた。フォードは

泣いた。職工達も一文の給料も貰へないことを忘れて、フォードの胸中に同情して泣いた。

### 一 徹底した勞資協調

かうして危機は去り艱難を突破して、フォード自動車會社は次第に發展の隆運に向つて行つた。自動車の贅澤品時代を突破して安價堅牢な實用自動車時代の實現——此の着眼と努力は、のみ見事に成功した。僅か十數年の間に米國が先づ自動車の洪水時代を現出し、フォードは世界第一の自動車製造會社の社長になつた。

フォードは實際家であると共に理想家だと云はれる。彼は自己の利益と共に社會の利益を忘れたなかつた。此の點が彼の最も偉いところであり、同時に偉大な成功をした所以である。といふのは、社會大衆の利福に關係しないやうな事業は、決して大なる成功を持ち來たさなといふ自家の見識を、小氣味のいゝくらゐ事業の上に實行して成功したからである。彼はまた自己の利益増進は、職工の利益増進に一致するといふ考へ方は實に徹底してゐた。彼くらゐ現代の



資本主義を善く擱んだ人間はない、と云はれる理由はこゝにある。米國に大資本家は掃くほどにゐるが彼ほど思ひ切つた職工優待を斷行するものはない。否、米國のみでなく、世界に於ける第一人者であるといつて溢美でないかも知れぬ。

歐洲大戰の勃發した一九一四年の一月、彼は自己の工場で働いてゐる職工の最低賃銀を一日五弗と定め、且つ八時間労働制を斷行し、更に同年夏には使用人に對する利益分配の制度を施して、全米の資本家のみならず、世界の資本家階級を呀つと云はせた。中にはフォードの此の大英斷を目して、驚くべき無謀として嘲笑を以て迎へ、狂人染みたお調子者と罵つた者さへあつた。

併し、彼の英斷的新制度の實行は、彼が輕卒者でもお調子者でもなく、立派に實際を指導する理想家であり、先覺者であることが事實の上に立證された。彼が新制度を斷行した翌月の成績は、従來に比し正に一萬臺以上の製造能率が擧つた。此の論議の餘地だにない明確な事實は二度頑迷な世間の資本家達を吃驚させるに充分だつた。

かういふわけだからフォードの會社には、未だ曾て唯の一度も労働爭議といふものゝ起つたためしがないのである。

### 一 獨創的經營法

一昨々年筆者の友人で歐米を視察して來た者の歸朝談に憑ると、フォードのデトロイトの大工場には約三萬人即ち三個師團の兵員に相當する職工が働いて居り、その製造能力は一ヶ年三百萬臺、時間で行くと一分間に七臺出來るといふ驚くべきもので、一ヶ年の取引高は十億弗を突破し、利益も一億弗以上に擧る素晴しさ、フォード自身の富は何處まで殖えて行くか測り知られぬものがあるといふ。然も彼の最も理想とするところは、大工場の大經營ではなく、農業を中心とする小工場の綜合的經營であつて、現に農村に小工場を建て、農業に従事した後の數時間を工場に出るやうにし、然も他の工場以上の能率を上げてゐる。又、銀行を利用せず、出資家の喰物になることを防いでゐるのも一大特色であらう。今や彼のフォード型自動車は完全



に世界の交通界を風靡してゐるが、彼の成功は實に事業や富の點ばかりでなく、人格徳望に於ても全米に噴々たるものがあり、大統領候補者にまで擬せられてゐるから、彼の決定的な成功の總量は、餘程晩年のページに至らぬと豫想がつかない。最近フォードが事業を子息に譲り、彼は専心社會事業に働くといふ外電が新聞紙上に見えたが、事實は果して然るか未だ保證の限りでない。

それは兎も角として讀者諸君よ、一度圓タクの運轉手にでもかう聞いて見給へ。

「君、どの車が實際に一番いゝかね？」と。

彼等は必ず諸君にかう答へるだらう。

「さあ、フォードですかね。安いとか體裁が悪いとかで、一時は自動車を知らぬ人達から随分馬鹿にされたが、矢張りフォードですよ。フォードの車ばかりは土臺機械の出來からして違つてゐるさあ」

フォードの言葉――

一、自分のためを考へる前に、先づ世のため人のためを考へた事業でなければ大なる成功へ導かれぬ。

二、事業に成功する唯一の秘訣は、最も苦しいと思ふ仕事の中へ眞一文字に突進し、死力を盡して飽くまでそれに嚙り付くことにある。

三、如何に苦しくとも金のことでは必要以上精神を煩はすのは、事業の成功を破壊するものである。只眞直に自己の希望理想の中へ自己の全精力と全努力とを打込めば、金は求めずとも自づから其處に湧き溢れて来る。

四、賣値を下げよ、賃銀を上げよ。その割合に應じて事業は發展して行く。

五、富を最後の目的とするところには富は寄りつかない。

六、より大量生産とより安價提供とは、人類の文明生活に於ける物資生産の最後の理想であり坦道である。



時計王服部金太郎

(増徳老人第九話)

一 唐物屋の丁稚

「今日は枕を抜にして、早速本題に取り掛りませう。明治七年、京橋八官町に辻といふ唐物屋があつたが、服部は當時十五歳で、金どん／＼と呼ばれ此處に奉公してゐた。

すると此の辻の筋向ひに小林といふ時計屋があつて、金どんの金太郎は向ふの店先きで親仁さんがコツ／＼時計の修繕をしてゐるのを見るのが、何よりの楽しみだつた。

暇があると、相手の店先きに立つて、ジーツと熱心に修繕振りを眺めて居る。始めの中は小邪魔な丁稚だ位に思つてゐた小林の主人も、馴染むに従ひ伶俐者の金太郎が可愛くなつて來て仕事をしながら時計の話面白く聞かせてくれた。時計と云へば、カツチン／＼ぜんまい仕掛

で動くものだと許り思つてゐたら、日本にだつて元祿頃からボツ／＼和製の時計が出来てゐて誰でも知つてる水時計、日時計を始め蠟時計、火繩時計、線香時計、舟時計、太鼓時計など、随分凝つたものまであつたことが分り、西洋時計なんぞは、六百年も前に出來てゐたことを知つて、金太郎は時計に愈々興味を覺えたが、元來何事でも上の空で見聞しない性質であつたと見えて、こいつア時計屋といふのはいゝ商賣だ、今に誰も彼もブラ下げるやうになるだらう——と小供心にもそこへ思ひついた……」

一 親父の強意見

「で、或る晩、主人から二三時間の暇を貰つて、同じ京橋采女町の親父の喜三郎の許へ、奉公替への相談に行つた。かなりませてゐた方さね……ところで服部の親仁といふのは、銀座に夜店を出してゐたケチな古道具屋だつたが、律氣一片な人間でしてね。息子の唐物屋を止めて時計屋になりたいといふ言葉を聞くなり、



「馬鹿野郎！」 黙れ！と頭から我鳴りつけたものださうです。

「これ、手前はそんなことを相談に来て、ウン諾し！と返辭をする親父だと思つてゐるのか?! 馬鹿奴！ 修業中に氣が挫けて、他の商賣に替りたがるやうな意氣地なし野郎で、何が出来ると思つてゐやがるのか」

「……………」

「石の上にも三年——人間辛棒が第一だぞ！ 何の商賣でも、どんな稼業でも身を入れて一心に永い間辛棒すればこそ花實も結ばうといふもの、人間は移氣が一番に不氣ねいぞ。輕はずみなオツチヨコチヨイ野郎は、何をしたつて出世するものぢやアねえんだ。唐物屋が何で悪い！ 時計屋が何處が良いんだ？ どれも同じ金を儲ける商賣ぢやねいか！ 手前みたいなフワ／＼した野郎は、唐物屋に入れば今度は時計屋になつてみたくなる、時計屋になれば又他の商賣に眼が移る、心が變る。生涯腰が据らねえで中途半端で終つちまうんだ。ど、どうでも時計屋になりてえなら勘當だ……………」

と、こんな調子に親仁の喜三郎、頭ごなしにガミ／＼呶鳴りつけた。

以ての外ほかにの鼻息はないきだから金太郎も弱つたが、かうと思ひ込んだら、却々親の意見でも肯かぬ氣象しやうの倅せがれだつたんでせう、下を向いてゐたのが聽きて鎌首かまくびを擡もちげて、

「お父さん！ 御意見はよく判つてゐますが、私はそんな移氣うつりぎや氣紛きまぐれで出て來たんぢやありません……………」

「そんなら何んだ?!」

「一體家の身代たゐちのしんたいは幾何いくわあると思つてゐるんです」

といきなりお可訝かしなところへ逆寄さかよせして來た。

「いんしよ、だと?!」と親仁おやぢが苦い顔かほをして、

「何を言やアがるんだ、手前に訊きかれるまでもないや。多寡たぐわが夜店商人よみせあきんどの古道具屋ふるだうぐや、身代しんたいなんぞと大業おほげな錢ぜにがあるものか」と吐き出すやうに云つた。

「サア、そこですよ。私は唐物屋たうぶつやが厭いやになつて時計屋とけいやになりたいつて云ふんぢやありません。



たゞ唐物屋の奉公を終へて、さて店を持たうといふ時、誰が一體資本を出してくれるかと考へたんです……」

「お店で暖簾を分けてくれらア」

「そんな暢氣なことを言つたつて、唐物屋は資本のかゝる商賣、おいそれと一本立で始められるもんぢやないと、番頭達が何時も話してゐます」

「ウーム……」と親仁もこれには詰つちまつたのさ……」

### 一 逆捻ぢを喰はせる

「そこで金太郎は親仁の喜三郎の様子を見い〜、

「それよりは時計屋……と考へたんです。よく世間で、金がなけりや腕に職がなくちやア不可ないつて言ひませう。時計屋といふ商賣は腕に職もつくし、賣つて儲ける商賣にもなる——とかう其の小林の主が云ひ〜してゐます。それに今でこそ贅澤商賣と云はれてゐるけれど、先

先必す誰でも使ふものになりますよ。お父さん！ 時計職人の腕さへあれば、資本なんぞなくとも、立派に立つて行けると思ふんですが……」と、親仁の方であべこべに意見されてるやうな貌になつちまつた。

一徹者の親仁だけに、スツカリ又息子の發明に感心しちまつて、

「フーム、良く云つた。他人の中に出てゐる中に、よくそれだけの理解がつくやうになつた」とこんな負け惜しみを云つて「諾し！ 許してやるぜ。立派に時計職人になんな」

「それぢや、ならしてくれるね！」

「良いとも。男が一度決心した事だ。お前は子供でも男の端くれ、量見通り立派な腕に磨き上げてみせてくれるよ。親父アお前の云ふ通りの貧乏人、總領をいらくも頭の時分から御店奉公に出して、ついで未だ好きな本一つ買つてやつたことのねえ情けない人間だ。せめて俵の好きな商賣でもさせてやらねえと、親冥利が盡きるかも知れねえや……ハツハ、金や、良く云つた。親父アお前の云ふことを聞いてゐる中にすつかり嬉しくなつてな……嬉しくて涙が溢れ



さうなくれえよ。ハツハツハ」と、親父の喜三郎が泣き笑ひに喜んだが、此の時の恩愛は今でも忘れぬ——と服部が嘗て人に話したことがあります」

一「閉店よし」

「然し、何分その頃は未だ時計の需要も少く、時計屋も數へる位しかなかつたから、それだけ昔からの習慣で時計直しは一種の秘傳のやうに勿體がつけられ、却々容易く人に教へなかつたものでした。金太郎は小林から手藝をつけて、日本橋上槇町の龜田といふ時計屋に奉公することになつたが、矢張りオイソレと教へてくれず、毎日使走りや小守にばかり追使はれてゐた。仕方がないから氣長に時節の來るのを待ちながら、暇さへあれば好きな書物を買つて來て讀んでゐたが、不幸なことに此の店は住み込んでから二年目、急に商賣を止めることになつたので金太郎は龜田の主人の世話で下谷の坂田といふ店に住み替へることになつた。

で、まる二年只働き同様に何一つ仕事を覺えられずにしたまつた金太郎も、此の店に來てから

ボツ／＼時計直しを教はることになつたが、サア、思ひが叶つて遣るんだからそれこそ一心不亂、メキ／＼腕が上つちまつた。新參者でメツキリ腕が見えて來る上に、人間が馬鹿堅くて朋輩の交際も知らないと來てゐるから、世に云ふ職人根性といふやつで、大分仲間の者から苛めぬかれたさうでした。仲間から悪しざまにされただけならいゝが、いろ／＼蔭口を叩かれた結果、肝腎の主人にまでつらく當られた。これに就いて落語の下げにでもなりさうなお可笑な話が残つてゐるのです。或る晩仕事ですんでから、金太郎は二階の職人部屋でコツソリ洋燈を點して十八史略や經典餘師なんでものを讀んでゐると、主人がズカ／＼上つて來て、

「オイ、金の字。ランプの油も無錢ぢやア買へねえんだよ。早く寝ちまふなり、職人らしく吉原へ素見にでも行つて來い」とつけ／＼毒のある叱言を喰つた。仕方がないから燈火を消さうとすると、

「何だ、お前のその讀んでる本は？」と怖い顔して訊くから、

「へエ、經典餘師でございます」と恐る／＼言上したが元より解らう筈のない相手、



「何？ 閉店良しだツ？！ オイ！ そんな筈棒な本を讀んでどうしようてんだ。手前は坂田の店の潰れるのを願つてゐるのか！」と飛んでもない勘違ひをして、カン／＼に怒り出したんでさすがの金太郎も腹が立つやらお可笑いやら、悉く持て餘しちまつたといふ珍談です」

### 一時計店開業

「かういふわけで坂田の店に足掛け三年、若い割に随分苦勞はしたが、その代り立派な時計職人になつた。他の者に輕蔑され乍ら讀んだ書物が助けとなつて、僅か三年の年間でモウ押しも押されもしない腕になつたが、丁度三年目の十九の時、相當大きく營つてゐた坂田時計店も主人が相場かなんぞに手を出したのが元で、それこそ「閉店良し」どころの洒落にもならぬ始末で遂々店を閉めることになつた。そこで金太郎は采女町の我家に歸つて、早速習ひ覺えた時計直しを始めた。と、云つて何分資本のない身體だから、先づ夜分になると、蠟燭の邊から人形町あたりの夜店を素見して破壊れた古時計を買つて來ては、これを修繕して相當の値段に

賣つて利益を取り、休む暇もなくこんな仕事を三年ばかり續けてゐる内に、塵も積ればなんとやら僅かな利益を貯めた金が積り積つて、金太郎二十二の時には當時ではかなり大金の二百兩ばかりのものになつた。親父が古道具屋で倅が時計の直しをしてゐるんだから、こいつは掘出し物のう、まも合ふわけです。

で、明治十四年町内に小さな店を持つたが、店の商だけではやつて行けないから、相變らず市内の古道具屋を漁つて破損れた時計を買つて來てはコツ／＼修繕して、又こいつを賣つて僅かな利益を見るといふやうなことをやつてゐた。誰しも一代で大身代を作るやうな人間は、若い時分から人の二倍も三倍も働いてゐるものだが、服部が矢張りそれで、朝は暗い中に起きて夜は人が寢靜つてから寢る、起きてゐるその間は働きづめといふ按配で、儲けた金は一厘の無駄もせず貯金をしてゐる内に、開業後僅か二年で千五百圓といふ金が残つた。ヤレ、これを資本に更に一奮發と思つてゐた矢先、向ふ側から火事が出てポーツと一緒にやられてしまつた。大概氣を落してしまふところだが、服部はこれしきにめげず、焼け残つた些細の品物と賣り出



した信用を資本にして、再び今度は木挽町五丁目に新しい看板を上げ新規捲き直しに踏み出したが、此の時服部は二十五歳、まつたくの血氣旺りでした……」

一 三十日明日の支拂

「ところで、その頃横濱の居留地にアイザック・コロンといふ時計の輸入商がゐて、京濱の時計商人はみんな信用借りで此のコロンから時計を借りて市中の小賣に卸すといふ一種の仲買的な商賣をやつてゐたものだが、勘定は三十日明日と云つて、品物を借りた日から三十日経つた翌日に支拂ふ約束になつてゐたが、却々此の三十日明日の契約を實行しない。三十日が三十五日になり二月、三月も遅れて、三月明日などいふ鹽梅になつて、約束の固い外人のことだから眉を擡めることが多かつた。此のコロンに金太郎も取引を頼んだのですが、コロンがいろいろ檢べてみると、店は至つて小さいが他の信用も立派なもの、これならばと云ふんで漸く三十日明日の支拂ひ契約で取引を始めたが、他の日本商人が却々約束を守らないのに、服部は期日

を一日も遅らさせず、三十日明日の日は勿論のこと、一日早くさへキチンと金を納めに來る。始めの中は店も小さいのでどうかと怪しんでゐたコロンも、金太郎の取引の確實なのを見込んで、次第に貸借も大きくして來て最初三百圓位だつたのが千圓二千圓と貸すやうになつたが、或る勘定日の當日、服部が例の通り勘定を持つて行くと、コロンは約束の堅いのを喜んで南京町へ支那料理を喰ひに行かうと誘つた。

すると、今まで快活に應待してゐた金太郎が急に悄氣た顔付きになつて「折角だが今日は實際へない」と云ふ。幾ら勧めても聲込みばかりしてゐるから、コロンも外人なりに不審に思ひ出して「どうしてかく？」と訊ねられるまゝ、服部はどうにも仕方がなくなつて、「コロンさん、私今日は懷都合が悪い。また何時か御交際します」と馬鹿に正直なところを白状してしまつた。

「何？ お金がない」と碧い瞳を睜つて問ひ返したが、

「冗談……ハツハ、貴方、冗談云つてます」てな調子で眞個にしなく。



そこで服部は無言のまゝ、先刻勘定を拂つたばかりの財布の口を開けてコロンの前に出して  
みせたが、コロンは中を覗いてみて、

「ヒヤ、五十銭?!」と不覺奇聲を張り上げた。

「コロンさん、お恥しいが此の通りです……無論いつもかうではないが、今日は貴方への支拂  
日だから、思ふやうに集まらなかつた掛金の足し前を店からそっくり持ち出して、今貴方に支  
拂ひをして残つたのが此の五十銭です。店にも銀行にも、私の現在持つてゐるといふ金は此の  
外に鑑一文も無いです……」

コロンがビツクリしてね。暫くその五十銭と服部の顔を穴の開くほど見比べてゐたが、やゝ  
あつて異様に眼を輝やかせながら、

「貴方、偉い! 私貴方の誠意、始めて判りました。西洋人、支拂の期限を違へない、貴方の  
やうな氣持でするんでない。たゞ習慣あります。然し貴方は眞心。これ私共聞いてゐる武士  
道あります。日本武士道あります」と旺んに武士道を振り廻して褒め上げたが、コロンは更に

大きな掌で服部の手をグツと握り、

「ハツトリさん、これから、品物、遠慮なく持つて行つて下さい。一萬兩オーライ! 二萬兩  
オーライ。私の取引出来る範囲内で、貴方は幾何でも借用して下さい!」と力を込めて打ち振  
つた。

### 一 精工舎で成功

「それにしてもコロンに見せた此の五十銭、そいつア服部の一つの手段ではないかといふ疑ひ  
を持つ人もありさうだが、誰が好んで取引の相手に二分玉のしんいよう、ありたけを見せるやつ  
もあるまいから、先づ服部の立派な逸話として、信用して聞いておいて差聞へないでせう。兎  
に角此のコロンの信用をすつかり得たのが、時計商人として服部の成功の緒口で、それ以來店  
に不相應な商をドシ／＼やれるやうになつて、時勢もよかつたらうが、見る間に素晴らしい發展  
をした。明治二十八年には、朝野新聞の後を買ひ取つて、銀座尾張町の角に、震災前まであつ



たあの大きな三階建の時計店を拵へ上げてしまった。

で、コロンとの取引から一步を進めて、外國との直接取引となり、更に輸入品に對抗するた  
めに御承知の如く精工舎を起して和製品の製造に努力したから、服部の名聲と信用は日一日と  
高まつて行つて、今日では精工舎の時計も支那から蒙古あたりまで出るやうになつた。服部時  
計店はたしか現在資本金一千萬圓、積立金四百五十萬圓と記憶してゐますが、裸一貫からこれ  
だけの大會社の主となつたのは何にしても偉い。商人で大きく成り上つた人間なんでものは、  
どれも随分極どいところを潜つて來てゐるだけ、敵もあり悪口も叩かれるものだが、比較的服  
部の評判のいゝのは、矢張り若い時から信用を重んじて、人物に素眞面目な點があつたからで  
せう。

### 一 八百萬兩丸焼け

それに就いては大正十二年の震災で、服部時計店も八百萬圓からの損害を残して灰になつた

が、此の時店の品の他に顧客から預かつた修繕の時計が何千となくあつて、これも無論一緒に  
焼けてしまつた――

なにしろ保險會社が先に立つて、定款にどうのとあたじけなことを云ひ出してゐたあの際  
だから、これは元より兩損となるべき性質のものだつたらうが、服部は顧客の品を預かつて焼  
けたからでは濟まないと云つて、焼け残つた帳簿を調べさせ殆んど同じ品を外國に注文して、  
各顧客に重々看びを言つた上返品した。

儂は此の話聞いた當時「追がに服部だ、やつたな！」と思つたが、果してこれが世間の評  
判となつて、服部の信用を益々よくした。かういふ事は、云ふべくして却々行ひ難いもの、金  
高にしても莫大なものの上つたらうが、服部に商人としての平素の覺悟があつたから、あの際  
に能くあの眞似が出来た。地道の商人として信用を得る、得ぬの境目はこゝで、同時に大きく  
なる、ならぬの岐れ路も此の邊かも知れません。服部も今年はたしか七十三、名代の白髪が愈  
愈眞白になつて來たが、元氣だけは若い者にも負けないやうだから、日本の時計王として此の



先もつと延びれば、満更見物でなくもありますまい。

「人間は少し成功するとチキ氣の弛むものだが、此の時が一番危険で、大きくなるも小さく固まつてしまふも、多く此の時に分れる。だから人間は弛みなく働き続けることだ」と服部金太郎が、入を掴まへては此の意見を話す話を聞いたが、處世の指針にまで、商賣物のネジの締め方を説いてゐるなぞア、いつそあの男らしくて面白いやね。アツハツハ、」

### ビール 王馬越恭平

(増徳老人第十話)

#### 一十五で厭世自殺

「ビールの馬越は弘化元年十月生れで、備中國木の子村の名家馬越元泉の次男坊だが、家柄は立派でも内輪は大變な火の車、十五歳の時先考の元泉から僅か二朱の旅費を貰つて勉強のため

也すく修り続けることだ

大阪に出たが、金は途中の路用に使ひ果し、其の頃有名な漢學者後藤松陰の塾に學僕に住み込んだ時には、拾一枚に古禪しかなかつた。

さうでせう、如何にも、安い當時でも二朱ぢやア道中は骨が折れます。

ところで此の後藤松陰は聞くと見るとは大いに相違の人物で、金持の倅たちには手を取つて教へるが、學僕の馬越はトンと構はぬものだから、すつかり癩に障つてね、「世間は金だ」と深く心に刻み込んで、プイと故郷に歸つちまつた。

然し、學問をしたいのが最初からの志だから、いろ／＼田舎にゐて先生を探したが、岡山あたりに良師もなく、家運は傾むく一方なので、スツカリ世の中に厭氣がさして、夜中村の溜池に飛び込んでぶく／＼しかゝつたが、幸ひ通りがりの百姓に助けられた。七十を越して雛妓弄りがやまないなんて悪口を云はれて來たあの馬越に、厭世自殺をやつた昔があるなんて云つても眞實にしない人が多いかも知れないが、事實こんな慘めな話があつた。  
で、其の百姓から懇々と若氣の過ちを意見されて、本人もカラリと氣が變つてね。



「よし！ 兩親の達者な内に、抵當に入つてゐる家作田地だけでも受出してやらう。それには「子曰」ぢや金は出来ぬ。いつそ商人になつてやれ」と思ひ立つた。そこで、なるにしても立ち寄らば大木の蔭でえ譯で、親戚の播磨屋仁兵衛に頼んで、大阪の鴻池へ丁稚奉公に出ることになつた。これがまあ馬越の財界に出る出世の緒口になつたんだね……」

と増田翁、其の煙を軽く輪に吹いてみせた。

### 一新米の強請

「で、兎に角同じ小僧でも松陰塾で學んだだけに、今日で云へば先づ學校出、それに貧乏でも家柄が立派だから、早速當主新十郎のお附小僧、謂はゞ小姓格に納つた。その頃は馬越も未だ名を五三と云ひましてね。目から鼻へ抜けるやうな性質だから、主人の鴻池から五三、五三と氣に入られてゐた。こいつをはたから聞くと、小僧々々と呼んでゐるやうに聞えて本人情氣たさうだが、此の五三が鴻池に居る間に主人のために一つの手柄を立てた――」

或る日、奥庭の茶室で主人の茶の相手をしてゐると、何處から降つて湧いたか、羊羹色の裕の着流しに素足の草履穿き、櫛を握つて落差しにしたのが、にゆつと主従の前に現はれて、「鴻池の御主人とお見かけ申して、少々御無心がござる」てな調子で、づか／＼鴻池に詰め寄つて来た。今日で謂ふと暴力團だね。何しろ御維新前の浪人者と来ては始末の悪かつたもので、祿に離れても武士は武士、斬棄御免といふ厄介な御免を持つてゐたから、下手をするとすぐばつさりやられる危険がある。

然も庭もずつと奥まつた茶室先き、チツとヤソツと騒ぎ立つても聞えぬ場所だから、鴻池新十郎顔の色を變へて、

「な、な、何の御無心……」

「拙者九州表までまゐるもの、少々都合あつて路銀を借用致したい」と、これは極り文句です。此の浪人者年は若いがしつかりした面魂、服装はお粗末でも腰の物だけは光つてゐる。それだけでも少々では引ツ込みさうに見えないのを、此の時まで様子を窺つてゐた五三が、



「お侍さん、いくら御入用だね？」といきなりイケぞんざいな口をきいた。

こいつに毒氣を抜かれてね、

「手前に申すのではない。控えろ」と叱りつけたが、五三は飽くまで人を喰った顔で、

「お前さん、追剥はまだ新米だな」と又かうやつた。

「何ッ！」てな具合で、柄頭を叩いてみせたが、

「さうぢやア無いかね。家の旦那はこれでも、日本國中に知られ渡つた鴻池新十郎、早い話が何處へ行つて何を買ふつたつて現金なんぞ要る身體でありません。だから、いつでも御手許は空さ」とトボケたことを云つた。

「財布になくとも、金櫃には山とある」と五三の口車に乗せられて、ウカ／＼相手になつて来たから、

「サアそれだ。金櫃のあるところまで一緒に行つてはお前さんの方の御都合が悪いでせう。だから貴方は新米だ」

「ウム……」と苦笑ひした。

「鴻池は町人でも二百や三百の人間が居ますよ。貴方のやうな物騒なお客さんが店の方へ行つたら、三百人が一度に騒ぎ出しますぜ。それより、先刻店から預かつて来た金がこゝに十兩ありますから、これを持つて貰ふんですね」とつい少し前主人から、白高麗の建水を買つて来いと云つて渡されてゐた金を、抜からぬ顔で浪人の前に出した」

### 一人を喰つた小僧

「あんまり達者だから、却つて鴻池の側でハラ／＼したが、侍が、

手前から貰はうとは思はぬと、苦がり切ると、

「まあ、さう云はずに持つてつて下さ」

「主人から借用致す」

「それがないから困つたものさ。遠慮しないで持つておいでよ」といつた調子。



十六、七の小僧にかう舐められちやア刀の手前があるから、

「痴けめツ、あまり出過ぎた眞似を致すと其の分には捨ておかんぞ」と、遂々腹を立つて斬ると威しつけたが、斬られませうと云つて、五三平氣で首をさしのべた。

これぢやア手のつけやうがない。浪人が呆氣に取られたといふより、感心してしまつた様子で、

「何うも大變な小僧ぢや。貴様、何んといふ名だ？」と照れかくしにこんなことを訊いた。

「五三でさ。旦那は殺した人間の名を手帳にでも控へておいて、後で供養しよう」と云ふんだね。

いゝお心懸けだ」とやつたから、

「はツはツはツ。いよく面白い奴ぢや。名は何と申す」と間が悪いで名ばかり訊いてゐる。

「だから五三ですよ」

「小僧は判つとる。名を訊ねるのぢや」

「だから五三」

「小僧は判つとる」

「小僧ぢやない。五と三と書いてゴザウ」

「あゝ、左様か」なんて間の延びたことを言つたが、強請もかう氣が脱けちやア凄みもなにもあつたものでない。愚圖々々してゐると引ツ込みがつかなくなるとでも思つたか、手早く十兩を懐中にして、

「いや御主人、良い奉公人をお有ちぢや。忠臣に免じて、これで御無禮致す」てなところで、早いところこの高塀を乗り越して、何處かへ退散しちまつた。

此の浪人が後に幕末から維新にかけて、我財界の利け者となつて、幕府の要路を取つちめたりしたのだが、五三とも後年奇遇の一幕があらうといふのですから、世の中は妙なもの、名前を申し上げちまふと一層面白いが、それでは故人の名譽を毀けることにもなるから、茲では或る浪人で我慢をしておいて頂かう」



一 馴合ひの夫婦別れ

「かういふわけで、五三の恭平は益々鴻池の氣に入りになつたが、後に主人の口利きで、播磨屋仁兵衛の養子になつた。この播磨屋は鴻池とも別懇の間柄で、用達業を営んでゐたが、これは却々難かしい商賣、先づ諸藩の出入をする、倉屋敷を大阪に持つてゐない大名が來て泊る、町奉行所に訴訟代人で出頭もすれば回漕業もやる——といったやうな譯で、餘程の人物でない」と此の稼業は遣つて行けなかつた。

「五三なら、俺の後を引受けて立派にやつて行けさうだ」と仁兵衛さん喜んだが、此の人の内儀さんが氣難かしい女で、今日でいふとまあヒステリーだね。「それや貴方から見れば血統のこただから、さぞ嬉しいでせうよ……」と最初から變なことを云ひ出してゐるんで、そこで女房の方の血統の娘をといふので、未だ十かそこらの小娘だつたが、お喜久といふ娘を養女にして、行々五三と一緒にしようといふ話で家庭の風波が収まつた。

で、五三が播磨屋に養子に入つてから、愈々人間の働けるのが目立つて來て、どうして大人も跣足といふ具合、三年目の二十歳の時に、仁兵衛はもう隠居をして跡目を相續するまでになつた。それから慶應二年になつて、五三が二十四歳、喜久子が十五で婚禮をしたが、夫婦仲まことにいゝ、間もなく長男が生れたからいよ／＼一家和合して行くべき筈だが、どうも此の姑根性といふやつは、好くて悪し、悪くて猶悪しで、夫婦仲のいゝのを妬くのか、自分で見立てた嫁でありながら、兎角これにつらく當つて家内に風波が絶えない。とう／＼大ごと／＼の末に、喜久子は罪もないのに無理やり離縁といふ話になつた。馬越は若い自分から、輕口で人を笑はせることなんぞの上手な人間だつたが、心緊りで肚の出來た男「もう俺も此の家には居らんぞ」と心中に意を決してゐたが、それと色には見せず、妻君と何か内緒で話し合つて、あつさり里へ歸しておき、自分はそれから一月ばかり經つて、商用にかこつけて上京した。ところで五三の歸つて來た姿を見ると、行きに附いてゐた筈の鬘がなくなつてゐるから、養父母が吃驚したね。先生丁髷を切つて、その頃流行り始めの開化頭散髪に早變りしてゐたのさ。



仁兵衛は舊弊な一徹者だから、それだけでカンノ一になつちまつた。ところで五三先生の方は酒々としたもの、貴方のやうな恰好はもう時世遅れですよ。これからは異人の着るあのだんぶくろを着け、家もこんな舊式ぢや不便だから異人館に模様替へをし、佛壇なんて抹香臭いものは第一に片づけちまつて、私は切支丹に宗旨變へするつもりだ。「就いてはお土産に牛肉を持つて來ました」てえ勢ひで、竹の皮をほふり出したから、お有難やの仁兵衛が怒つたの怒らないの、自分の膝を殴りつけて眞赤に怒り立ちまつた。何しろ獸肉を喰ふことを大罪惡のやうに思ひ込んでゐる人間の、まだウンと残つてゐた時世だ。往々藥用にでも食する場合には、これを「藥喰ひ」と言つて、食つた人間は一週間なり二週間なり、神社佛閣の前は勿論、自宅の佛壇や神前も遠慮したくらゐのものです。ところが、五三が其の「藥喰ひ」を先づ大びらにやりはじめたから、サアそれから毎日毎晩の衝突で、とどのつまり、

「御先祖様へ對して申譯ない。五三に暇を遣らう」と一方が云ひ出すと、

「是非さうなさいまし。あれでは後世が怖うございます」と養父母の意見が一致して、五三は

首尾よく養家から追出されたが、その時の手切金が播磨屋のしんしようでたつた五十圓、ひどいことになるものさね。

兎に角五三は此の金を手にして、馴合で夫婦別れをしてゐた妻君共々、久方振りに郷里の木の子村へ歸つたが、この時馬越は恰度三十、妻君は九ツ違ひの二十一だつた。馬越は道樂者だつたが、大分此の女房が可愛かつたんだね」と、増田翁うす笑ひをした。

### 一 飼はれるなら大家の犬

「こんなイザコザで故郷へ歸つてみると、親達より親戚が先づ喜んだ。といふのは、馬越家の跡取の元育も、三男の章造も東京に出たまゝ郷里に寄りつかないため、年取つた兩親を親戚で面倒見なければならぬ破目になつてゐたので、五三が落着いてくれれば、大分荷が軽くなるといふ譯です。そこで親族會議を開いて「親類中で千圓だけ集めるから、それを資金にして醬油でも造つて土地に居ついてくれ」と頻りに口説いたが、馬越はどうしても故郷でくすぶる氣に



なれない。それに阿母さんといふのが却々氣丈な婦人で、「妻子は私が引受けるから、お前は矢張り江戸なり大阪なり、大きな舞臺で一旗擧げる工風をするがい」と云つてくれた。

此の時ばかりは、馬越も親の慈愛が身に泌みたさうだが、兎に角これで出郷に意を決し、僅かな金を懐にして東京に出て来た。

で、先づ頼るところは兄の元育と、早速家を訪ねてみると、これがまた意外の逼塞振り、一時は汽船問屋や新聞社の経営までして羽振りを利かしてゐたのが、すつかり御沈落で長屋住居の有様だ。

「五三、折角来たのに氣の毒だなア」と挨拶され、

「何アに、私にも考へがあります」と、奇麗に云つたものゝ、實は此の時馬越には格別何の當もなかつた。然しそこは兄弟だから、いろ／＼兄が弟の意見を尋ねると、

「私が大阪で鴻池へ奉公したのも、同じ飼はれるなら大所の犬と云つた譯なんで、今度も矢張り三井組、小野組あたりの大頭株を片ツ端から訪ねてみるつもりです」

「うむ。三井でよければ俺の知人がゐる。尤も少し事情があつて、絶交同様にはしてゐるが、此の際めんを被つて紹介状を書かう。兎に角素手で行くより、「だ」と兄貴らしいことを云つて呉れたが、馬越は寧ろ素ツ裸かでぶつかつた方が、勇氣が挫けないでいゝと考へて、わざと元育の紹介状も持たず、その翌日先づ第一に三井組の本店を訪ねた」

### 一 千兩役者以上の肚藝

「此の時馬越はもう恭平と改名してゐたんですが、三井の受附に来て、

「手前は馬越恭平といふ者ですが、實は大きな掘出物を持つて上つたのですから、是非共太政大臣級の方にお目にかゝりたい」てなことを云つた。

受附が目を丸くしましたらうよ。今日だとこんなのは、早速警察へ電話をかけられる口だが當時はその邊緩急なものだつた。

兎に角會つてくれるといふことになつて、馬越の案内されたのが時の三井の總元締の某の前、



三井の大身代を背負つて立つてゐた人物だけに、これがなか／＼の利げ者だつた。

「おや！」

と、互ひに先づかう感じたさうだが、何處やらで會つたらしいといふウロ憶えはあつても、何の誰といふ考へはすぐ出ない。

「……時に私も多忙だから、御用件を簡単に承らう。掘出物といふのは、何ですか？」と、こんな具合にさつさと片づけにかゝつたが、どうも見た男だといふ氣があるから、それとなく馬越の顔を見るやうになる。馬越もその通り、ちよい／＼上目を使つて、相手の顔で記憶を呼び起さうとしながら、

「卒直に申し上げます。事業の成否は人に在ると信じます。一人の遺賢を野に見出すことは、百萬千萬の金を掘出したよりも更に値打ちがあると……」

「すると、人材でも推舉しようといふんですな」と要領よく話の腰を折つちまつた。

「無論さうです」

「どんな人だね？」とお義理にこれだけ訊かれて、

「不肖ながら私です」と馬越はすました顔で云つてのけた。

「はッ、はッ、は」と相手は笑ひ出したが、ふつとこれで「さうだ！あの小僧も此の調子だつたわい」と憶ひ出したんです。

かうなると別の興味があるから、

「時にあんたの名前は、恭平さんとかいふやうに受附の者が傳へたが……」

「さうです」

「ハ、ア……恭平さん……」と馬越の顔を今度は穴の開くほど見てゐたが、

「妙なことをお訊ねするやうだが、あんた、鴻池家に居たことはないかね？」

これで馬越もハツとするほど憶ひ出したが、

「居つたことはありますが……」と殊更に曖昧に云つた。

「ウム、すると其の頃、五三といふ名であつたね」



話がすつかり面白くなつて来たが、

「サア……」と馬越は相手の顔色を讀みながら、

「いや、矢張り恭平でした」とはつきり云ひ切つちまつた。

こゝが馬越だね。五三だと云へば、相手の素性を洗ひ立てる結果になるだけで、どつちにも利益でない。然し、三十やそこらで却々此の肚藝は出来ないもの、これですつかり相手から人間を買はれちまつた。

「フーム。あなたはあの時分から器量人だつたな。馬越さん、喜んで掘出物を買ひませう」とこんなことを云つた。

ところで馬越が、

「だが、高く買つて下さるんぢやア賣りませんぜ。何處の馬の骨とも知れぬのが、不意に轉げ込んで来た値段で買つて下さるなら、馬越恭平有難く賣りませう」とやつた。

「ウムーいよ〜君の意氣、氣に入つた。では私と直接關係のない先收會社の方へ紹介し

よう。井上馨さんが海外貿易をやらうといふので起した會社だから、買入の條件は向ふの肚次第。それなら君も文句はあるまい」

「いや有難いことです」とはじめてニコリとしてみせたが、此の邊の馬越の氣性は昔も今も變つてゐない」

### 一 御用立致兼候

「これは馬越が相手の素性をあらかじめ知つて、白ツばくれて押し蒐けて行つたといふ風にも充分トレさうな話だが、さういふ拵へて行つた談判では、かうスラリと男の意氣は合ひますます。

で、先收會社に入つてから二月ばかりで、馬越はもう無くてならぬ人物になつちまひ、最初の月給四圓五十錢が、忽ち十倍以上の五十圓に上り、一番番頭——今日でいふ支配人まで昇進してしまつた。



ところが其の後間もなく、井上さんが再び廟堂に立つことになつたので、先收會社は一時解散、社員は夫れ／＼手當を貰つて退散といふことになつたが、馬越は二千五百圓の退職手當を貰ひ、それに自分の貯金の五百圓を加へて、三千圓を握つて一度故郷に歸つた。が、無論田舎に埋もれる氣でなかつたところ、先收會社の暖簾を三井が直接引受け、營業を繼續するといふ話を持ち上つて馬越も呼ばれたので、早速又上京した。御承知でもありませんが、この先收會社が三井物産です。

新會社は社長が益田孝、副社長が木村正幹、恭平は番頭頭といふ役割で營業を始めたが、此の時も、馬越は實際の仕事を一人で切つて廻した。

二年後には元締役、只今の取締役となり、横濱支店長で本店の營業部長を兼ね、馬越恭平の名も大分中央に知られて來た。

或る時、益田、木村、馬越の三人が何處かで落合つた時、益田が、

「どうだね馬越君、何か安い掘出物はないかね」と別に皮肉でも何でもなく、こんなことを云

つた。

益田は有名な書畫骨董道樂です。

すると、掘出物には縁のあり過ぎた恭平、黙つてゐられずに、

「ありますとも！ 馬越恭平ほど安い掘出物はありませんまい」と一本、ピシヤリとやつた。

「何！」と官僚式の益田が憤つとして顔色を變へた。

こゝが益田と馬越の肌合の相違で、馬越は陽性だがカチリと何處かに齒徹へのある性質、益田は陰性の四角四面と來てゐるから、どうしても反が合はない。

矢張り其の頃、三井の總顧問井上馨侯から書面で「お前のところに日本一の赤繪の徳利があるさうだが、それで客をしたいから貸せ」と云つて來た。これは有名な井上雷侯の奥の手で、貸したら最後、捲き上げツばなしで返シツこない。

馬越は、徳利は別に惜しくもなかつたが、天下御免の大口が癪に障つて、

「……仰せの通り所持致居候へ共存寄有之御用立兼致候……」てえ思ひ切つた文言で、ポー



ンとこれを断つちまつた。

當時三井でも、その鼻息を窺ふに吸々としてゐた井上侯に、荒つぽく桶を突いたんだから、これは無事では納まらない。とう／＼こんなことが一つの原因となつて、馬越は折角の三井から追出されることになつた。随分馬鹿な話さね……」

### 一 麥酒會社に着眼

「馬越の三井に勤めたのはまる二十年、随分たぬになつて働いた方だから、退社の涙金は尠くも一年一萬圓の割で、二十萬圓はあるだらうと、人も吾も思つてゐたのだが、豈はからんや中味はたつた一萬五千圓だつた。

「巫山氣てぬやがる！ 八郎右衛門の面へ叩きつけてくれよう」と流石の馬越も、此の時ばかりは蒼くなつて怒つたさうだが、賢夫人の妻君に慰められて胸を擦つちまつた。

で、ムシヤクシヤ腹の遣りどころに困つたのか、馬越はその年郷里に歸つて、例の品川彌二

郎の選挙干渉で名高い逐鹿戦に打つて出た。ところが、相手が犬養木堂だから、見事負けてね、此の選挙費用三萬七千圓、涙金の一萬五千圓を棒に振つたばかりか、借金まで拵へちまつた。馬越も此の時、人生の定命の五十を過ぎること三つ、再び元の木阿彌に還つちまつたんだから、内心大いに凹垂れもしたらうが、こゝのふんばりの實に偉かつた男でね。「なあに糞ツ」てえんで、大いに若返つた顔をして、三度目に東京へやつて來た。

馬越は何を肚に考へてゐたかといふと、三井の在職中に、抵當流れで入つたのを知つてゐた、大日本麥酒會社の経営です。これは誰も手のつけ手のないくらゐのボロ會社だつたが、馬越は會社を見ずに、その事業を見た。

「ビール事業は必ず今に發展する！」とこの信念たゞ一つで、三井の手からボロ會社を引受けました。三井の方では厄病神を追つ拂つたやうな氣持で、馬越に渡すと一緒に、赤い舌を出したものです。此の事業に對する着眼は、馬越の方がずつと上だつた。

そこで馬越は先づ、三十五萬圓の資本を十萬圓に減資し、更にこれを二十五萬圓に増資した。



こゝまでは謂はゞ机の上の仕事だから、少し會社關係の經驗を持つた者なら造作もないことだが、この後にすぐ来るのがお定まりの運轉資金だ。ボロ會社でも、一旦營業したんだから道具立はちやんと揃つてゐる譯で、金さへ出来れば直ぐ工場の機械も動かうてえ次第だが、さて其の金に詰る。馬越としてはすつかり叩いてしまつてゐる上に、殊に三井とは喧嘩別れで手切つてゐるから、まかり違つてもこれには今更叩頭をして行けない筈だ。が、イザといふ土壇場で、矢張り間誤付くやうな馬越ぢやなかつた。ボロ會社を引受けた時から、馬越には馬越らしい胸算が出来てゐたんです」

### 一 命を擔保に借金

「馬越は最先に友人の富田鐵之助(初代の日銀總裁)のところへ出かけて行つた。一體馬越といふ男は人徳とでも云ふか、昔から良い友達の多かつた人間です。これは本人の性格が萬事さつくばらんで、自分も友達のことだと双肌脱ぎにでもなる性分のあつたせいであらうが、兎に角馬

越くらゐためになる友人を持つて來た者は、明治以後の財界でもさうたいと無いと云つて差つかへない。

で、馬越は富田に向つて何の仕事をやるとも云はず「俺の命を擔保にするから貸してくれ」と、こんな冗談とも本氣ともつかぬことを云つて、結局富田の手元金五千圓を借り受け、翌日はまた方面を變へて澁澤さんの邸へ行つた。

「一つ若返つて、例の四時間睡眠をやらうと思つてゐますよ」とのつけにトボケたやうなことを云つた。

此の馬越の四時間睡眠では、先輩友人間でも可成り有名な話になつてゐて、懸値なしに馬越はせわしくなると四時間しか眠らないが、それでゐて曾て眠むさうな顔を見せたことがない。美濃部俊吉、早川千吉郎と共に夜更しの三人男と囃されたくらゐで、夜更し結構、朝起き平氣、起きると冷水浴をして法華經二卷を讀むのが、今日でも馬越の日課になつてゐる。

さて、馬越は今の言葉を枕にして、



「……ところで濫澤サン、四時間睡眠の勵行も、目標がなくちや駄目ですが、今度その目標を作りましたよ。ツイ昨日も富田に會ひまして……」と本題に取りかゝつて、命抵當の一件を笑ひながら話した。

話がよく解つたと見えて、

「よろしい。私も應分の御援助をしよう。ちよつと失禮」と云つて奥へ立つたが、やがて大きな奉書包を持つて席へ戻つて來て、

「馬越君、儂もあんたの命を擔保に貰ひました」と笑ひながら投げ出したのが金一萬圓也でした。これは當時の財界で可成り有名な話題になつたから、御存知の方も多からう。

先づ曲りなりにも運轉資金が出來たが、馬越が頻りに「命の擔保」を振り廻したのは、滿更一の御座なりや駈引で云つたんぢやアない。ぬけぬけそんなことの云へる男なら、三井をあんな骨ツぼい経緯で滅になりもしなかつた筈です。

## 一 麥酒の大宣傳

そこで、愈々馬越の本當の命懸けの仕事が始まつた。例の四時間睡眠主義で四角八面に切つて廻すから、社員や職工だつてボヤ／＼しちやアゐられない。ボロ會社の車が、追々滑らかに廻り出した。馬越自身で方々に出かけて、エビスやサツポロビールの宣傳をしたといふやうな苦心談は、世間にもよく知れ渡つてゐるから茲には略しますが、先づ他人の想像もつかぬくらいな宣傳廣告の苦心をしたもので、そのため數年の間に、メキ／＼ビールも賣れるやうになつた。勝つて兜の緒を緊める、といふのが並の者の考へだが、馬越ばかりは、勝つた、ソレ突貫！といふせわしい調子で、息もつかさずビール事業を伸しちまつた。日本の市場から外國麥酒の姿を消したのは、馬越なんぞの働きが預かつて力ありませう。兎も角とう／＼東洋第一資本金四千萬圓の大日本麥酒會社を拵へ上げてしまひ、本尊の馬越も、その昔三井から貰ひそこねた金の何十倍何百倍の長者になつたが、金錢には割合淡泊な方で、金は使ふだけあれば澤



山なものだ』と口癖に云つてゐるのは、馬越のやうな本當の事業家で始めて吐ける言葉でせう。  
旅せずば話負けする月見哉

これが馬越の得意の句ださうですが、巧拙は別として、波亂重疊、克く艱難に堪へてあれまでも大成した馬越の心持として見る時、ちよいと味へる句だと思ひますよ。いや、こいつア飛んだ御説教になりました」

### 製鐵界の飛將軍シユワツブ

#### 一 振出は八百屋の小僧

製鐵界の巨人として、今や第二のカーネギーを謳はれてゐるチャールス・ミハエル・シユワツブは、北米ペンシルヴァニア州のウイリアムスブルグといふ土地の生れで、家は馬喰宿をしてゐた。少年時代の彼に就いては、何等特記すべき事柄がないが、唯非常に數學好きな小供で、

殊に機械に關しては特別の興味に抱いてゐたと云はれてゐる。

シユワツブの父親は其の渡世の示してゐる通り、教育も何もない人間だつたが、それだけ自分の子の教育については出来るだけのことをしてほしい氣持で、シユワツブを小學校から高等學校へ入れた。然し迎も卒業する迄の學資が續かなかつたので、殘念ながら三年でやめさせてしまつた。而して彼を懇意な青物屋へ手傳ひに出した。シユワツブは一時、學校教育を満足に受けられない境遇を悲觀したが、これが『生きた世の中への第一歩だ』と考へ直して、骨身を惜まず熱心に働いた。こゝまでは然し、世間にザラにあるやうな平凡な生立だが、二十七歳で大會社の重役に榮達したほど出世のテンボの早かつた彼だ、間もなく一の機會が此の青物屋の小僧の上に恵まれて來た――

此の店の得意の一人に、カーネギー製鐵所に勤めてゐるジョーンズといふ技師があつたが、シユワツブの忠實な働き振りと、機械に酷く興味を持つてゐる點に目をかけて、  
「君は職工になれ。必ずエンジニアとして成功する」と勧めてくれた。シユワツブ自身、將



來技術家として成功したい理想を持つてゐたから非常に喜んで、是非共自分を職工にしてくれ  
るやうに頼み込んだ。青物屋の主人は彼を手離すことを惜んだが、知合の者の息子ではあり、  
しつかりした人の引立ただからいなやも云へず、希望通り彼はカーネギー製鐵所に入った。  
偉材シユワツプは、此の如くにして早くも人生の行路を得たのである。

### 一 太閣以上の出世振り

ジョーンスの眼鏡は違はなかつた。シユワツプがカーネギー製鐵所へ入つて間もなく、彼の  
仕事に對する異常の熱心さは、多くの先輩職工を驚ろかした。

彼は單に與へられた仕事に熱心であるばかりでなく、製鐵方法や機械の改良研究にまで魂を  
打ち込んでしまつてゐるやうに見えた。

「チャールス・ミハエル・シユワツプ！ ほう、そんな熱心な職工がゐるかね」と所長カー  
ネギーをして早くも其の名を記憶せしめたシユワツプは、聽て鉄鐵から鋼鐵を精製する方法の

上に驚くべき改良を施して、非常な好成績を挙げた。

而して僅々數年の間に、彼は製鐵所内で諸一人肩を並べる者も無いほど、卓越した技術者に  
なつてゐた。

カーネギーは「シユワツプほど其の仕事に精通せるものは、恐らく世界に二人とあるまい」  
と激稱して、彼を七千人の職工長に拔擢した。時にシユワツプ二十四歳。突飛なことの好き  
なのが米國人の共通性としても、此のカーネギーの人材拔擢主義には氣紛れは一つも無かつた。  
其の翌年シユワツプは、彼の考案した新製鐵法によつて、從來廢物として棄てられてゐたもの  
の中から莫大な優良品を製出することに成功し、而も鋼質をして躍進的に向上せしめた。

それから三年後の二十七歳の時、重役中に缺員を生じたので、カーネギーは直に彼をして其  
の後を襲はしめ、年俸五萬弗を以て遇した上、更に利益配當として五萬弗を與へた。腕のある  
人間を優遇する點で、到底他の資本家の眞似も出来ぬ藝當をやつたカーネギーの下でも、これ  
は先づ後にも前にもない破格の優遇だつたと云ひ残されてゐる。



かうして彼は若冠にして重役の地位に上つたが、更に三十五歳の時、總取締役の任に拔擢せられ、小壯此の世界的製鐵會社の總指揮として、思ふ存分その手腕を揮ふことになつた。ちよつと此の邊の人事的躍進振りには、事大主義、鰻上らせ主義の我國では、見ようとしても見られない米國式のスピードではある。

### 一 鋼鐵トラスト總裁

若きシユワツプは鋼鐵王カーネギーの女房役として、無比の適任者と全米に喧傳された。その快手腕に惚れて誘惑の手が幾つもの身邊に集つた。英國の或る大製鐵會社は、年俸百萬弗出すから、二年間彼を貸して貰ひたいとカーネギーに申込んだ。モルガン製鐵會社の社長大モルガンは、年俸百三十萬弗出すから来てくれと、彼の袖を引いた。併し彼は、然ういふ羨やむ可き誘惑に振り向きもしなかつた。彼は飽迄年俸數萬弗を以て甘んじ、ホームステツドの總取締として日夜激務に執掌した。總て彼の年俸は、一躍、全く字義通に一躍百萬弗に増俸さ

れた。これは一種の佳話である。而して彼の手腕は歐洲にまで喧傳され、彼の名聲は世界的になつた。

で、彼の三十九の時、全米の大資本家によつて資本金十億弗のユナイテツド・ステイール・コーポレーションといふ空前の鋼鐵大トラストが出現したが、その最初の總裁として彼れチヤールス・シユワツプが推擧され、年俸百三十萬弗を以て酬いらるゝことになつた。此の百三十萬弗は、恐らく前のモルガンの呼び値から決定されたのだらうが、兎に角三十九の壯年者流で、全米富豪の信任を得て満場一致で推擧されたといふのだから、彼の手腕力量の非凡さは、此の一事を以てして想像するに餘りある。

ところで其の頃、ベツレヘム製鐵會社といふのがあつて、相當歴史のある會社だつたが、經營者に人を得ないため年々衰微して、五十弗全額拂込の株が二十五弗まで下落し、會社は遠からず解散の運命に迫られてゐた。當時シユワツプはソロソロもう獨立して、誰からも掣肘を受けない立場で思ふ存分手腕を振つてみたい氣持を持つてゐたので、あらかじめカーネギーの諒解



を得て、窃かにその會社を自分の名で買収して置いた。カーネギーの懷を離れて一本立で乗り出すには、寧ろさういふボロ會社の立直しから出發するのが、自己として最有利なりと信じてゐたのである。而してこれには何時でも着手し得る準備の出來てゐたところへ、大トラスト總裁の推擧を受けたのであつた。

彼も一寸これに迷つた。

### 一 急轉直下ボロ會社の社長に

併し、後者の方はカーネギー初め全米製鐵界の滿場一致的推薦である以上、一旦はどうしてもその任に就かなければならない。そこで彼はベツレヘム會社の方は買収のまゝにして、トラスト總裁に就任し爾來三年間獨特の快腕を振つた。さうしてトラスト事業が世界的に確實な進展を見たところで、ズバリと總裁を罷め、いきなり半死半生のベツレヘム製鐵會社の經營に着手した。

此の行動は、當時米國の財界を随分湧かしたものだといふ。二十七か八でカーネギー製鐵所の總取締役となり、四十になるやならずで大トラストの總裁にまで出世した彼が、これから先どんな世界的の活躍をやるかと、歐米の資本家達から刮目的となつてゐた矢先、突如トラスト總裁の榮職を弊履の如く抛つて、誰も引受手のない貧乏會社の社長に納つたのだから、大なるセンセーションを惹き起したのは寧ろ當然である――

『まるでウールウオース・ビルディングのつべんから、落下傘で飛び降りるやうな眞似をして見せる男だ。それにしても一體どんな氣であんな思ひ切つた眞似をしたのか?! シュワツプのことだからまるきり自信のないことをやる筈がないが、或ひはモルガンあたりと意見の衝突でもしたのではないかな――?』と噂は噂を生んで、一時新聞雜誌のゴツツプと云へば、必ず此のシュワツプの破天荒の行動で持ち切りだつた。

併し彼自身は、世間の毀譽褒貶には耳も藉さなかつた。彼には深く信ずるところがあつた。『言ふ者は何とでも云へ。俺は自分の目的とする所に驀然に突進するばかりだ。いくら大トラ



ストの總裁だらうと、自分一個の意見で切り廻せないやうな仕事は、断じて男子の本懐でない。何者の容喙撃肘も受けず、自己の手足を動かすやうに自由自在にやつてのけられる仕事であつてこそ、俺の眞の事業と言へるのだ。今に見て居れ！ 世間が輕蔑してゐる此の貧乏會社がどんなものになるか」

### 一 職工を重役待遇

彼は直に、會社内部の組織制度の根本的改革を断行した。彼は十五名の工場技術委員といふものを任命したが、其委員には一切の情實を排し、眞に手腕ある者ばかりを抜擢した。即ち手腕ありと認められたものは、平職工だらうと、一時傭ひの者だらうと、眞に無差別に抜擢して委員の重職に据えた。而して彼等に重役待遇の俸給を與へ、製鋼法並に機械製作上にあらゆる新改良、新工夫を案出することを命令し激勵した。これは不振會社の發展の上に、最も策を得た遣り方だつた。彼等は、製鐵界のナポレオンと呼ばれて來た此の新社長の信頼に感激して、徹底

的の働き振りを見せ始めた。工場の労働時間はカーネギー製鐵所同様八時間制であつたにも拘らず、彼等は夜十時十一時を過ぐるまで家庭へ歸るのも忘れて、全く獻身的に働いた。社長シユワツプが魂のすべてをベツレーム會社に打込んでゐた如く、彼の十五人の部下も心魂を自分達の與へられた仕事に打込んだ。

シユワツプはまた一般の職工に對しても、その待遇を一變し、充分な優遇方法を講じてやつた。無能な人間や冗員に對しては思ひ切つた減給をしたが、然も何處までも彼等の鹹を切らなかつた。鹹を切るよりもさうしておいて、彼等の自覺と發憤を促がした。

かうした結果が悪からう筈はない。半死半生の會社は、氣絶してゐた者が息を吹き返したやうに忽ちにして甦つて來た。會社の製鋼法や機械製作上の進歩した改良案は、ドシ、技術委員の熱心な研究によつて提供され、その成績は全従業員の力で着々と擧つた。シユワツプの手に移るまで缺損々々を續けてゐた會社の成績も、シユワツプの巨腕によつて經營されるやうになつてからは、俄然その年末に於ける決算を一變した。損失が早くも収益状態に變つた。併し



彼は何處かの國の資本家のやうに、會社の利益を自己と株主の間に壟斷しなかつた。彼は最初から此の貧乏會社の浮沈を、少數の重役や單なる資本の關係におかず、全従業員の手に在ることをよく知つてゐた。而して會社を復活せしむる實力者たる従業員を優遇することが、結局資本家それ自身の利益であることを知り過ぎるくらゐに知つてゐた。彼は年末決算に於て、全利益の三分の二を従業員に與へ、會社の利益配當を三分の一しか取らなかつた。

シユワツプは工場技術員のみでなく、平職工、日傭人夫に對しても、苟くも改良考案に熱心な者には、惜まず研究の費用を與へ便宜を與へた。彼が如何に改良進歩に熱心であつたかは、後にたつた一つの考案に對して一千五百萬弗を費したといふ一事でも首肯することが出来る。

### 一 米國式ノンセンス

かうして彼が新たなる組織制度、新たなる改良考案に全力を注いだ結果は、その製品の品質と價格に於て、ベツレヘムは斷然他社を壓倒して、事業は日に日に急速の進展を見て來た。會

て五十弗全額拂込の半値にまで下落した同社の株式が、ウール街で七百弗の高値を呼ぶに至つたのでも、彼の會社の異常な發展振りが想像されることである。

かうなると、以前彼のトラスト總裁辭職を摩天樓から飛び降りたやうな危険、寧ろ彼の事業と名聲の惨死と心得てゐた連中も、始めてシユワツプの眞意と眞價を悟ることが出來た。

彼が歐米の同業者、然かも何層倍かの大資本を擁する幾多の大會社を敵として、眞に巨人の如き歩を進めてゐるうちに、彼の事業を一段と大飛躍せしむる絶好の機會が襲來した。

それは一九一四年に起つた歐洲戰亂だ。八月に戰爭の火蓋が切られて、二ヶ月後の十月には英國の陸軍大臣キツチナー元帥から、彼に至急電報を以て、倫敦で會見したと申込んで來た。シユワツプは直に旅装を整へ、ホワイト・スター會社のオリムピック號に乗つて倫敦に向つた。此の時の英國陸軍省に於けるキツチナー元帥と彼の會見は、最も鄭重を極めたものであつたと傳へられてゐる。而してその會見の目的が、軍需品製造の注文であつたことは云ふまでもない。キツチナーは然し彼に對して、幾らか不安な面持で恚う訊いた。



「向ふ一ヶ年間に、砲彈百萬發の製造を引受けて貰へませうか？」  
彼は言下に應へた。

「十日間を以てお間に合せ致しませう！」

數百萬の獨逸同盟軍に怯ともしないキツチナーも、此の大膽極る即答には呀と驚かされた。一百萬發の砲彈だ、一ヶ年の日子を以ても果して何うかと危んでゐたくらゐなのに、たつた十日で間に合せるといふに至つては、寧ろアメリカ式ノンセンスとして、元帥は苦笑せずにはゐられなかつた。然し、ノンセンスでは濟まぬ非常の場合である――

「十日間ですつて?! 注文は砲彈百萬發ですよ」とキツチナーは百萬發に力を入れた。

「シユワツプさん。百萬發の砲彈を僅か十日間に間に合せて下さることが眞に可能ですか、實際において！」と更にかう念を押さずにはゐられなかつた。

### 一 英國軍を煙に巻く

するとシユワツプの頬には氣持のよささうな微笑が浮んだ。

「仰せの通り、正に砲彈百萬發をです。兎に角閣下の方では、御注文の砲彈がより早く提供されることに御不平はない筈だと信じます。百萬發の砲彈を十日間で製造することの出来ないやうな私なら、かうして閣下の御招電に應じて、態々ロンドンくだりまで遣つて参りは致しません」と平氣な顔でやつてのけた。而して彼は約束通り十日間で、百萬發の砲彈を英國陸軍に間に合せた。

歐洲戦争は彼の畢生の活舞臺だつた。彼は擱む可きものをよく擱んだ。當時英國政府、否朝野の彼に對する信頼は非常なものだつた。

次に彼は海軍大臣のフィツシャー卿と會見した。フィツシャーは彼に二十五隻の潜航艇の建造を注文する考へだつた。戦時中英國海軍の最も必要としたのは潜航艇で、現に五十隻はあつたが、例の獨逸の潜航艇が暴威を揮つて彼方此方に神出鬼没し、聯合軍の海軍が散々な目に遭はされるので、之に對抗上どうしても潜航艇の數を急増しなければならなかつた。そこでフィ



ツシヤ一卿は彼に問ふた。

『二十五隻の潜航艇は、凡そどのくらゐの期間で出来上りますか？』

今度は彼も少し難かしい顔をして考へてゐたが、

『さやう、特に支出を惜まず急がして下さるなら、九ヶ月間に完成してお渡しいたしませう』

『何、九ヶ月？』

『然うです、九ヶ月間です』

彼の此の答は、陸軍省でキツチナ一を驚かした以上に英海相フィツシヤ一を驚かした。

然し物は潜航艇である。戦争をする潜航艇である。然もそれを二十五隻も建造するとすればどんな建造能力を以てしても、断じて一年以内に出来る筈はない。フィツシヤ一は軍事専門家だから、その邊のことを充分心得てゐる人間である。それを一年どころか、僅々九ヶ月間に完成して渡さうと云はれたのだから、殆んど啞然として二の句が次げなかつた。而して如何に製鐵界のナポレオンと呼ばれて濶歩してゐる彼、近くは百萬發の砲弾を無造作に十日間で引受け

てやりおはした彼にしても、二十五隻の潜航艇が九ヶ月間で出来上るといふことだけは、フィツシヤ一にはどうしても信じ切れなかつた。

そこで當時世界に報道されて、偉大なゴシップを製造したフィツシヤ一對シユワツプの有名な賭が起つた。

『宜しい。では斯うしませう。若し九ヶ月間の期日より遅れたら、一週間延びる毎に一隻につき十五萬弗づゝ私が支拂ひませう。若し又期日より早く出来たら、同じく一週間毎に十五萬弗づゝ貴方の方から頂戴することに致したい』

此のヤンキー式の抜目のない賭事に、謹嚴なフィツシヤ一も微笑を含んで頷いた。

『承知しました！是非貴下の方で御約束を違へんやうに』

## 一 世界的大賭博

潜航艇二十五隻九ヶ月間完成の契約は、かういふナンセンス的條件の下に成立した。併しシ



ユワツプにしてみれば洒落や冗談事どころでなかつた。約束通りの期日に完成出来なくて、假りに一週間でも延びたとすると、彼はフィツシヤ一卿に對して、一隻十五萬弗合計三百七十五萬弗を支拂はなければならぬことになる。その反對に一週間早く拵へ上げてしまへば、建造費以外にそれだけの金額が自分の懐へ飛び込んで来るのだ。此の賭は一場のウイットに非ずして下手をすれば會社を潰してしまふか否かの、一世一代の大芝居だつた。

シユワツプはフィツシヤ一卿との會見を終へて海軍省の門を出るやいなや直ちに、優秀な職工八百名の雇傭と材料の買入を、暗號電報を以て米國の本社に打電した。而して彼が英國政府から合計二億弗餘の注文を提げて米本土へ歸つて來た時には、勿驚、潜航艇二十五隻の龍骨がもうちやんと工場の中央に据付けられてあつた。此の社長にして此の工場ありとでも謂ふ可きであらう。

彼は全力を擧げて建造工事を急がせた。而して其の結果は約束の九ヶ月より一月近くも早く完成して、彼は微笑の中にフィツシヤ一卿から五百萬弗の賭金を受取つた。此の金額はどんな

計算から割出されたものか當事者以外には不明だつたが、兎に角彼はその五百萬弗を即座に全部の従業員に分け與へ、自分は一弗も手にしなかつた。こゝらに彼の眞骨頭があり、同時に一種の宣傳上手さが窺はれるといつてよい。

然し軍需品引受けは英國のみでなく、佛國からも伊太利からも、多量の注文を受けたのである。即ち聯合軍が使用した全砲彈の七分の一は、實に彼の指揮の下にベツレム製鋼會社の工場で製造されたものであつた。

かうして彼の實力手腕は米國は勿論、ちよつと世界的にも比肩し得るものがないまでになつたのだが、彼の遣ふことは一々世人の意表に出で、然かも結果たるやまた世間を常に呀つと云はせずにはおかなかつた。米國が大戦に参加すると同時に、彼は民間から擧げられて米國海軍造船所の所長に任ぜられ、齊しく列國の注目を引いたが、参戦後同造船所が前代未聞の大規模の造船計畫を樹て、而もそれが法螺や吹聴倒れでなく、着々實際に實行してみせて世界を驚嘆せしめたのは、一に所長チャールス・ミハエル・シユワツプの快手腕に負ふところだつた。



大戰終了後彼は再びベツレヘム製鐵會社の社長に戻り、現にその統帥者として縦横の手腕を揮つてゐるのだが、彼の會社は例のユナイテッド・ステイール・コーポレーションを除けば、實に世界最大の製鐵事業であつて、故カーネギーの大製鐵所さへ凌駕してゐるのである。で、彼も本年は六十四歳、事業も人も正に圓熟期に入つたが、シユワツブのことだからこれから先もまたどんな思ひ切つた飛躍をやるか知れぬと、始終米國人の好奇心をムツ／＼させてゐるといふのは甚だ面白い。

此の偉大なるナポレオン・シユワツブ！こそ、近代資本主義の潮に最も善く乗つて成功した現代的英雄の一人である。

こゝに云ふ資本主義とは、所謂搾取のみに吸々たるブルジョアジイの鬼面ではなくて、よく人間を集め、よく人間を生かし得た勞資の殿堂を指すのである。

左にシユワツブのモツトゝを掲げておく。

一、人を使用する場合には小僧人足でも、自己の事業を成功させてくれる分擔者だといふこ

とを忘れてはならない。

二、自國一を目標にしてゐたのでは自國一にはなれない。最初から世界の第一人者、世界一の事業を目標として邁進しなければ、自國の第一位をさへ占めることが出来ぬものである。

——チャーレス・ミハエル・シユワツブ——

### 鋼鐵王カーネギー

#### 一日給四十錢の火夫

△大カーネギーは何うして成功したか？ 何が彼の出世の端緒となつたか？

吾等はそれを語る前に、一應矢張り彼の生立に溯る必要がある——

△鋼鐵王安ドリユー・カーネギーは一八三五年スコットランドのダンファムリンといふ片田舎に生れてゐるから、彼は先づ米國人ではない筈である。然し生涯米國の舞臺で成功したと



ころから、ヤンキースは彼を我等のカーネギーと呼び慣れてゐるが、國籍は何處までも英國に在つて、故國に於ける五十四の公民權を持つてゐた。随つて英國人も亦彼を我等のカーネギーと呼ぶ。いづれにしても彼の價值には何等變りもないことだが、兩國民から引張爪にされた點だけでも、彼は實に資本主義世紀に於ける偉大な存在の一人であつた。

△彼の父はダンフアムリンの小さな機織家だつたが、どうも商賣が思はしくなかつたとみえて、カーネギーの十三の時、一家を擧げて新大陸移住を決心し、大西洋を越えて米國のアレガニー市に來た。米國移住後彼の父がどんな仕事をやつたか餘り傳つてゐないが、移住したその年から少年カーネギーは「生きた世の中」へ出て働かなければならなかつたところから見ても、一家の狀態は大略想像されると言つてよからう。

△彼は最初アレガニー市の綿絲工場の釜炊の見習に雇はれ、週給一弗三十仙を貰つた。一弗三十仙といへば約二圓六十錢ばかりだから、日給にすると四十錢ばかりのものになる。彼は朝から夕方まで息詰るやうに蒸熱い機關室で、石炭をくべたり運んだり、その他いろ／＼の雜役

のために、グタ／＼になるほどコキ使はれた。カーネギーがよく釜炊から出世したと云はれるのは、此の時の體験を云ふのである。

△で、彼はこれを一年ばかり辛棒したが、年齢的に云つてもあまり勞働が激し過ぎたので、何か他にもつと勉強する餘裕のある仕事にかはりたいと思つてゐた。すると丁度ビツツパーダ電信會社で電報配達夫を募集してゐる廣告をみつけたので、彼は得たりとばかり早速配達夫に應募した。

△さて此の新らしい仕事に従事してみると、工場の釜炊とは比べものにならぬくらゐ樂だつた。電信配達もひつきりなしではないから、勤務中でも充分勉強する時間があつた。そこで彼は電信に關する本を買つて來て、熱心に讀んだ。何しろ週給三弗だつたから、とても充分欲しい本は買へなかつたが、電信會社のアンダーソン大佐といふ軍人上りの所長が、カーネギーの勉強振りの熱心なのに感心し、自分の圖書室で自由に圖書を見ることを許して呉れた。彼は嬉しくて堪らず、毎日暇さへあればアンダーソン大佐の圖書室に這入り込んで、貪るやうに種々



な書物を書架から引出して讀んだが、これがどのくらゐ彼の啓發に役立つたか知れなかつた。「アンダーソン大佐は、私の最初の恩人だつた。私の貧しい教養は大佐の圖書室で出来上つた」と、かう彼は後年言つてゐる。

△かくて彼は獨學で勉強しながら十七になつたが、その間に電信智識を充分に會得した。或る時、技手の留守中電信が通じて來たが、丁度誰も居合せなかつたので、彼が電信室に飛び込んで受信した。技手がやつて來てこの事を知り、早速支配人に話をしたので、支配人は試みにカーネギーに電信を打たせてみたところ、その正確で迅速なことは専門の技手さへ遠く及ばなかつた。彼は一躍電信技手に引き上げられ、週給三弗が倍になつた。間もなく彼は電信技手としてオハイオ電信會社に雇はれたが、此の會社に入つたことでソロ／＼もう彼の出世の端緒が開けかゝつてゐた。

△オハイオ電信鐵道會社に雇はれてから、彼は才氣を現はす前に先づ勤勉を發揮した。然し此の青年が尋常な人間でないことは、直ぐ上の者に分つた。彼は間もなく鐵道部支配人トマス・

スコットに認められて鐵道附電信技師に拔擢され、週給二十五弗を給せられたが、聽て或る事件の上に一社を驚かすやうな手腕を現はして、確實に自己の勝利を擲んだ――

### 一 獨斷の指令電信

△或る時、スコット支配人の外出中に重大事件が突發した。それは或る停車場の附近で列車衝突の大椿事が起り、爲めに其の後の各列車の發着時間を變更せねばならぬことになつた。それも一二瞬間の遣り繰りなら造作もないことだが、全線に亘つて行はなければ、到る所で事故の頻發する惧れがある。かういふ場合、電信技師の打電の正確であるか何うかは全線に重大な關係を有し、一字の間違でも直ちに列車衝突の椿事を惹起すことになる。従つて會社でも鐵道附電信技師は、最も技術優秀で正確敏速な者でなければ任命しないことになつてゐた。而して厄介なことには、どんな火急の電報でもすべて支配人が署名したものでなければ、勝手に打つことの出来ない規定になつてゐた。



△然るに樁事の起こつたために、各驛から頻々と列車運轉に關する照電がやつて來た。が、何人も臨機の處置が取れなかつた。技師ばかり何百人ゐても、さういふ重大な事件は勝手に取扱ふことが出來ぬ規定になつてる上、一つ間違へば大變なことになるから、取扱へと云はれても誰も事に當る勇者がない。さういふ間にも各驛からの電信はひつきりなしにかゝつて來た。何しろ列車はもう一時間近くも各驛に立往生の儘になつてゐるのに、本社から膿んだとも潰れたとも指令が來ないので、驛の方では氣が氣でないらしかつた。カーネギーは支配人の歸りを待つことに既一時間に及んだが、依然として歸る模様がなかつた。

彼は斷乎として決心した。これ以上一分でも遅れれば、會社も乗客も益々莫大な損失を蒙ることになる。彼は會社の損失乗客の迷惑を考へると、もう一刻もぢつとしてゐることが出來なくなつて來た。

『よし！ 俺が獨斷で指令電信を發しよう』

△彼は從來のダイヤグラムを卓上に擴げ、それに自分の考へ通りの運轉時間の變更を記入し

て應急のダイヤグラムを作り上げ、それへ獨斷で支配人の署名をして全線各驛に運轉指令を發信した。列車は直ちに彼の作製したダイヤグラム通りに運轉を開始した。彼は十二分の確信を以て斷行したのではあつたけれど、實際の結果がどうなるかは、道が不安で堪らなかつた。ところが何事もなく、整然として運轉は繼續された。

一 機會は此處に

△支配人のスコットは出先で列車の衝突事件を聞き、青くなつて會社に駈け戻つてみると、意外や列車は既に何事もなく運轉してゐた。

『誰が?!.....!』

さう云つたつきり、彼は自分の廻轉椅子に腰を卸して社内から答への出るのを待つた。

スコットの前には若きカーネギーが立つてゐた。

『私が獨斷でやりました！ 貴方の署名も無斷で拜借しました。私は、自分の責任のあるのを



充分に知つてゐます』

カーネギーの手にはダイヤグラムがあつた。支配人はそれに目を遣つた。

「君、ちよつとそれを見せ給へ」

△スコットは彼の作つたダイヤグラムを見て驚いた。かゝる火急の場合に、會社の得失に關し、また一般乗客の人命に關する應急列車のダイヤグラムを、これほど巧みに、これほど遺漏なくやつてのけるとは、何といふ素晴らしい手腕だらうと感心せずにはゐられなかつた。且つ今度のやうな場合にもつと指令が遅れてゐたら、或はスコット自身の責任問題を起したかも知れなかつたのである。

支配人は「ウーム」と云つたまゝ暫らくダイヤグラムから顔を上げずにゐたが、やがて立ち上つてカーネギーの手を固く握つた。

「カーネギー君、君の機宜の處置は會社と私自身を責任から救つてくれた。私は君の獨斷を決して咎めなく」

△咎めないどころか此の事件によつて、カーネギーは同支配人の秘書役に拔擢された。

これは或は平素から深くスコットの信任を得てゐたので、さうした際にも思ひ切つた處置がトれた次第かも知れないが、いづれにしても、非常に臨んで大膽に所信を敢行したのが、彼れ出世の階梯となつたのである。カーネギーは爾來十年間此のスコット支配人の秘書役として會社の樞機に參劃し、だん／＼事業界といふものに接近して行つた。

### 一 相場に手を出す

△彼が事業といふものに強い興味を持ち出したのは、當時スコットから何かの報酬として、アダムス急行列車會社の株券十枚を貰つたのがそも／＼だと云はれてゐる――

彼は最初たゞ支配人の厚意を感謝しただけで、株券そのものについては何等特別の考へは持たなかつたが、その株券が一月ばかりの中に相場の高騰で、六百弗からの利益を彼に與へたのですつかりびつくりした。



△その事あつて以來彼は、株式なんてものは何といふ素晴らしい儲け方をするものかと、非常に興味を持った。次でその株券の価値を動かす会社といふもの、而して會社の内容たる事業自体に湧然たる興味を持つやうになつた。それまでは單なる技術家の理想に止まつてゐたのが、早くも廣く事業方面に研究の頭を振り向けるやうになつた。尤もこれには支配人秘書役の位置も預かつて力あつたと想像される。

△二十七の時、彼は貯金の中から一千弗を割いて石油事業に投資した。その次には寢臺列車を創始したブルマン鐵道會社の株券に投資したが、間もなく同社の株は倍額の市價になつた。彼は益々株式が面白くなつて來た。

△恰度その頃、ペンシルヴァニア鐵道會社の社長エドガー・トムソンが發起人になり、スコット支配人其他自社の幹部がこれに加つて、キーストン鐵橋會社といふのが設立された。彼はこれを將來非常に有望な會社だと信じたので、先づブルマン會社の株券を賣り拂ひ、持つてゐた金の全部を投じて、此の鐵橋會社の株を持つた。

然るに不運なことには、キーストン鐵橋會社が設立されて間もなく例の南北戦争が起つたために事業界は大打撃を受け、同社も御多分に漏れぬことになつたが、特に設立早々の際とて殆んど破産状態に陥り、株主の大部分はみんな所有株を投げ出して、株式は無代でも貰ひ手がな

いまでに大暴落をしてしまつた。  
△まだ年は若かつたがカーネギーはこゝで考へたのである。「戦争は一時的のもので決して永久のものではない。今や合衆國內の事業は一時に停止し、諸會社は瀕死の状態に陥つてゐるけれども、戦争さへ終れば必ずすべての事業は復活する。随つてキーストン鐵橋會社の事業も屹度盛んになつて來るに違ひない。此の會社自体は大いに發展を見る可き内容を持つてゐるのだから。要はただそれまで踏張つてさへ居ればいゝのだ。さうして機會は今なのである！ 俺は大多數の株主が投げ出してる株を全部自分の手に買ひ占めてやらう」と。

一 大膽な買占め



△さう考へるや彼はシヤニムニ暴落株を買ひ入れ始めた。然し未だ一會社の使用人で、さう大きな金が自由になる譯はなかつたから、友人知己から借りられるだけ借金して買った。スコット支配人や友人達が彼の暴舉を極力諫告したが、彼は自分も成算なくしてやるのではないから、まあ成行を見てゐて貰ひたい位なところで、正株を買つて買ひ捲り、殆んど全株數の三分の二以上を買ひ取つてしまつた。此の思ひ切つた行動には、キーストン鐵橋會社の連中は勿論、株式界の商賣人まで寧ろ呆氣に取られてしまつた貌だつた。

△やがて戦争は終つた。沈滞萎微してゐた國內の産業は一時に復活し、潑刺たる好況時代がすぐ遣つて來た。果然、キーストン鐵橋會社の事業は盛んに振つて來た。直ちに増資の聲が起ると同時に、諸方面から株式應募の申込みは殺倒して、會社は寧ろ應接に轉手古舞するくらゐだつた。無價値同様に下落してゐた株式は一足飛びに二三十倍まで高騰した。さうして彼れカ―ネギーは、一舉にして二十五萬弗の巨利を獲得したのである。此の當時の二十五萬弗は今日のどのくらゐのドル價値に當ることになるか知らぬが、兎に角オハイオ電信鐵道會社の一秘書役

は、一躍富豪の仲間入りをしたわけであつた。

これが凡ゆる意味での彼の成功のスタートである。

△で、鐵橋會社で當りを占めた彼は、鐵の需要が將來如何に盛んになり、製鐵事業が如何に有望であるかを早くも知つた。彼は自己の好運に宇宙天になる前に、冷静に一身の前途を判断した。

事業！ 今こそ自己が堅實の事業に究進すべき時期だと、深く彼は信じた。

△當時英國で、化學的に鋼鐵を製造する有名なベツセマー製鋼法が発見され、これが非常な評判になつた。カ―ネギーは早速英國に飛んで行つた。而してダービーでベツセマー製鋼法によつて造られた鐵道のレールを見、シエフィールドでベツセマー化成爐を見た。

彼はこれこそ吾をして大ならしむる事業だと信じた。そこで米國に歸來するや直ちに、例の二十五萬弗に、友人知己から借り集めた金を合せて、ベツセマー式化成爐を据付けたカ―ネギー製鋼所を設立し、米國に於ける製鋼業の先鞭をつけた。時に彼はまだ三十一歳の青年で、そ



の活動力の迅速にして邁進性の果敢なる、世界の成功者の中でもちよつと比類のない傑出點がある。

### 一 人間を使ふことの魔術師

△その後の彼は宛ら無人の境を行くが如くトン／＼拍子に成功し、一八八一年にはカーネギー製鋼所は本家本元の英國を凌駕して、實に世界第一の製鋼事業を以て呼ばれるに至つた。(一九〇一年世界最大のトラストたるユナイテッド・スチール・コーポレーションが成立した時、カーネギー製鋼所は總資産三億九千萬弗即ち我約七億八千萬圓に見積られた)さうして彼は此の製鋼事業その他によつて全財産三十億弗といふ、空前の大富豪になつたのである。

△さて、カーネギーの此の素晴らしい成功の裏面には、彼の傘下に先づシユワツプの如き無類の傑物が居り、ビル・ジョーンズやモリソン、コルネリーやデインキー等の如き、容易に他の製鋼所に見ることの出来ない手腕家達が揃つてゐて、その智囊となり手足となつて、大いに彼を輔けた一事の與つて力あつたのを逸することが出来ない。

而も彼はそれらの手腕家を遇するに、他の資本家には眞似も出来ないやうな優待方法を以てした。如何に彼がその部下を優遇したかは、寧ろ別傳シユワツプの一例によつて、讀者諸君にその全豹を窺がひ知つて貰ふことを便宜とするが、兎に角カーネギーは生涯「人間を使ふことの魔術師」であつた。日本流に云へば、彼は生れながらにして將に將たるの器だつた。

△彼は「事業といふものは人生に於ける高尚にして且つ眞剣な遊戯だ」と、よくこんなことを云つた。また曰く「此の遊戯をよりよく遂行せんとするには、金錢を惜んではならない。即ち此の眞剣なる遊戯を完成せんがために參加する全ての使用人に對して、最大優遇を與ふことを忘れては駄目である」と。

△彼は「より多く」積む？ことをモットーとして生涯戦つたけれど、同時に一面において有意氣に散ずることを忘れなかつた。彼が三千の圖書館を建設するために投じた金は一億二千萬圓を越え、故郷のスコツトランド大學のためには二億圓を投じ、カーネギー研究所にも一億



圓、其の他世界平和のため和蘭のヘーグに平和宮殿を建設する等、彼が種々の文化事業に投じた金は實に十億圓以上に達する。

### 一 五十二歳で結婚

△その代り彼は衣類などの流行を極端に嫌忌し、贅澤を憎悪した。カーネギーの流行嫌ひは一種病的なもので、それは世界的に有名だが、實際彼は時代遅れの古服を何年でも平氣で着込んでゐた。だから歐米の富豪の如く自家用のヨットや特別列車などは思ひも寄らなかつた。彼は大ブルジョア階級とあまり交際をせず、労働者と握手してみせたりして悦んでゐた。彼は五十二歳で始めて結婚した非常な晩婚者だったが、それは事業に全精力を投げ込んでゐたために、實際結婚する違がなかつたのださうである。而して結婚してもカーネギー夫人は、社交界には絶対に出なかつた。娘が一人あつたが、彼は金持連中の申込みを拒絶して、有爲な青年鐵道監督の許に嫁がしめた。此の一事などは、能くピッツパーグの鋼鐵王の面目を現はして

ゐる。

△一九一九年、アンドリュウ・カーネギーは八十四歳で此の世を終つた。若し彼に百歳の壽命を藉したなら、恐らく百億？の富を積んだかも知れない。

### 一金言二十ヶ條

- 一、より多く求むればより多く與へられ、より多くなせばより大なる結果を生む。
- 二、支配人には少額の俸給と、株式で支拂ひ得る巨額の口錢とを與へよ。
- 三、大なる利益を得んとせば、先づ集中主義を採り、最も進歩した機械を以てより大量生産主義を行ふべし。また、すべての使用人を優待し、高き賃銀を支拂ひ、而して原價をより安くせよ。

- 四、機械と藥品を尊重せよ。
- 五、事業上の利益を更に投資すべし。



六、事業上の一切の報告を日々聞くことを怠るな。  
七、突發事件に對しては、冷靜慎重に考究せよ。狼狽して世間の噂や批評に附和雷同するな  
かれ。

八、自ら助けざるものを助くるは無益である。自ら助けんと努力する者を助けよ。

九、自ら助けざる者を助くるは寧ろ罪惡である。自ら助けざる者を助くるの道は、自ら助くることの努力を教ゆる以外にはない。

十、富を得ることのみに價値はない。得て、これを有意義に散するとき、始めて其の價値を生ずるのである。

十一、事業は高尚にして且つ眞劍なる人生の遊戯である。随つてそれは平和と理想の建設である。

十二、贅澤は個人を亡ぼし人類を亡ぼす毒素であり、最も穢らはしき罪惡である。

十三、模倣すな。創造せよ。而して人に先んぜよ。

十四、人に使はれて使用人根性、勤人根性を出すやうな人間は決して成功することはできない。

十五、雇はれて其の會社のために働くことと、自己の事業のために働くこととは同じ事である。

十六、熟慮と果斷の用意なき者は成功しない。

十七、最初から貯蓄せよ。汝を成功に導く第一歩は必ず汝の貯蓄であることを忘れてはならぬ。

十八、爲さんとする事は、必ず着手前に十分究めよ。

十九、強固なる信念と大なる理想とを持って。

二十、信すること、爲すべきこと、爲さんと思ふ事は勇敢に行へ。途中で躊躇すな、逡巡すな。驀進せよ、邁進せよ、最後の成功まで押し進め。

—アンドリユー・カーネギー—



## 石油王 ロックフェラー

### 一 辛辣な母親の鞭

△既に大カーネギーを記した以上、好敵手ロックフェラーを逸する譯に行くまい。

此の兩人は一は製鐵に一は石油にと、その事業において氷炭の差こそあれ、いづれも近代資本主義の潮に乗つて、一代にしてよく世界的の事業を起し、兩者とも實に三十億弗の巨富を積み上げた近世大ブルジョアの双璧である。而してカーネギーは今より十年前、八十餘歳の高齡で歿したが、彼より出生の遅ること僅かに四年、一八三九年生れのロックフェラーは、今猶九十翁として鏗鏘ゴルフなどの遊戯に耽つてゐるのは、眞に一の驚異とせざるを得ない。

△ロックフェラーの名は正しく呼ぶとジョン・ダビソン・ロックフェラーである。彼は自然美の恵み豊かな米國ニューヨーク州の平和な一小村チオガに生れた。親父のウィリアム・ユ

1・ロックフェラーは所謂事業好きで、いろ／＼な仕事に携り、そのために一家と共に幼い彼もつれ、随分あちこちと流浪的生活を送つた。その間多少成功した事もあり、時にはその日の生活にも困るほどの失敗を招いたさうだが、最後にクリーブランドに落つくやうになつてから、幾らか生活も安定した。かういふ家庭の事情で彼はそれまで碌々小學校へ通ふことが出来ず、十四歳になつて始めて學校通ひが満足に出来た。父ウィリアムは、我子が二十一になつたら與へるつもりで常に一千弗別に貯蓄してゐたが、決してその家庭に餘裕のあるわけではなく、ロックフェラーは毎日學校から歸ると、すぐ親仁の仕事の手傳ひをさせられたものだといふ。

△彼の兩親が家庭教育に嚴格否、峻厳だつたことは可なり有名な話だが、殊に母親の息子達——ロックフェラーには弟が一人あつた——に對する態度は、デスウィットの苛辣とでもいふか少々嚴格の度を越し過ぎたものがあつた。彼等兄弟にして少しでも命に背く行爲があれば彼女は秋毫も假借するところなく樺の鞭を揮つて譴責した。

△當時ロックフェラーの家からあまり遠からぬ處に冬期結氷する湖があつて、兄弟は固くそ



こへ行く危険を禁じられてゐたが、或る晩彼等は母親の目を盗んで、こつそり湖水へスケートに出かけた。すると遊戯中薄氷を踏み破つて水中へ溺没しかけた小供があつたので、ロツクフエラー兄弟は自分達の持つてゐた棒に相手をつかまらせて、やつとのことで救ひ揚げた。翌朝になつて助けられた小供の親が禮に來たので、此の一事が母親に知れると同時に、内緒の湖水行も當然露顯した。

阿母の棒の鞭は唸りを生じて、容赦なく彼の身體に飛んだ。彼は、もしバレても人命救助の善行で差引勘定して貰ふつもりだつたから、大いに不平な顔をしたが、彼女の曰く、

「親の云ひ付けに背いて湖水に行つた罪惡を、偶然の善行で許すことはなりません」

△而してまた或る時、彼は母親の禁じたわるさをしたといふ科で、イヤといふほど利き目のあるやつを頂戴した揚句、そのわるさは彼のしたものでなかつたのが明白になつた。彼は自己の冤罪について阿母に逆捻を喰はせたと、彼女は泰然自若として、

「ジョンよ、決してその心配はいらぬ。今の鞭はこの次の分と差引しておかう」と。

これには彼も開いた口が塞がらなかつたが、一面において其の時の母親の動ぜざる態度には、そゞろ小供心に畏敬の念を起さざるを得なかつたといふ。兎に角かうした少年時代の辛辣極る母親の陶冶が、どのくらゐ彼の後年の不屈不撓の精神を養つたかは、敢てこゝに贅するまでもなからう。

### 一 商業教育は實地に限る

△ロツクフエラーは十六の時高等學校（日本で云へば中學校）を卒業し、次でクリーブランドの商業學校へ入學した。その頃は彼の父親も幾らか工面がよくなつてゐたので、最初息子を何處かの大學に送るつもりだつたが、本人の希望で土地の商業學校に入れた。ロツクフエラーは然し、商業學校といふものにすぐ飽きちまつた。「商業教育なんてものは、斷然實地にやるに若くはない」とすぐさま考へついたので、僅か數ヶ月間で學校をやめてしまつた。而して速やかに實地に就くべきを決心し、クリーブランド中に就職口を求めた。



△併し、彼をすぐ店員に使つてくれる店も却々なかつた。彼はそれに懲りず行き當りばつたりに勤め口を探してゐる中、「明日の午頃もう一度来てみてくれ」といふ店が一軒あつた。大いに喜んで翌日行つてみると、給料に就いて當分何等の希望も云はなければといふ條件の下に、快く採用してくれた。

△その年の暮に彼は、四ヶ月分の給料だといつて五十弗興へられた。一ヶ月十二弗五十仙といふ給仕同様の安い給金だつたが、此の十二弗五十仙が石油王ロツクフェラーの記念すべき最初の収入である。然し此の店——ヒュウイツド・タツトル商會は廣く雜穀類の卸賣仲買と運送とを兼ねてゐたので、商賣を見習ふには持つて來いの店だつた。彼は帳簿掛をやつてゐたのだが、店全體の營業を習得することを怠らなかつた。

△翌年彼の給料は月二十五弗づゝになり、其の又翌年には早くも帳簿方の主任となつて一躍年俸七百弗に昇給した。尤も世間並の給金相場からいけば、これでも馬鹿に廉かつたのだが、何しろ本人が未だ十七か八の小僧ツ兒なので萬やむを得なかつたのだらう。

「私は然し幸福だつた。ヒュウイツド・タツトル商會は取引範圍が普通の商店の如く偏して居らず、あらゆる方面に涉つてゐたので、商業取引を研究修業する上には、年俸の二千弗や三千弗に代へられぬ大きな利益があつた」と、彼自身當時のことをかう云つてゐる。

### 一 十八歳で商會經營

△兎に角此のヒュウイツド・タツトル商會が、種々の意味で彼の財界に身を起す搖籃であつた——

丁度その頃、店へちよい／＼取引にやつてくる英國生れのクラークといふ青年があつた。これはクリーブランドで小さな雜穀店をやつてゐたが、商賣上の手腕も秀れ、頗る頼もしさうな人物なので、ロツクフェラーは彼と非常に親密になつた。

或る時クラークはロツクフェラーに向つて、

「僕は自分で此のタツトル商會のやうな店を始めたいと考へてゐるのだが、残念ながら二千



弗しかない。もう二千弗ないとやれないので、出資者を探してゐるのだが誰か適當な共同者はないか？」とかういふ話をした。

『有るとも、クラーク君！それは僕だ！』とロツクフェラーは言下に應じた。

△併し彼には、俸給のうちから貯蓄してゐた金が未だ七百弗しかなかつた。三百弗位は何うでも都合がつくとして、あと一千弗が問題だつた。彼は早速父ウイリアムに一千弗の借款を申込んだ。

『お前が二十一になつたら無條件で其の金をやる考へであるが、それまでは文句なしに與へるわけにゆかん。年一割の利息を拂ふなら貸して遣らう』とこんなことを親仁は云つた。そこで彼は年一割の利子で一千弗を引出し、やつと二千弗にしてクラークと共同事業を始めた。無論タツトル商會の方は罷めたわけだが、此の時彼は十八歳、クラークは少し年上の二十二歳で、何にしても未だ青年中の青年だつた。

△彼等はクラーク・ロツクフェラー商會の業務を分擔した。クラークは販賣仕入に長じて

わたのでその方面を受持ち、ロツクフェラーは店の遣り繰り一切を引受けて、兩名は一生懸命に奮闘した。而して商賣は彼等の期待通り順調に發展して、デキに一千弗増資の必要が起つた。この資金調達にはロツクフェラーの受持つた仕事なので、彼は土地の一銀行へ行つて頭取に面會し、携へて來た出荷帳と倉庫の受取證を提示して、二千弗の貸出しを相談した。それでも先づ十中の八九まで駄目だらうと思つてゐたところ、相手はズーツと營業書類を一覽して、『宜しい。無擔保で二千弗貸しませう』とアツサリ云つた。これが彼の金融に成功した最初の凱歌だつた。

### 一 早くも石油に着眼

△やがてロツクフェラーもクラーク同様外へ出て販路の擴張に馬力をかけ、オハイオ、インディアナ州の廣い範圍に互つて雜穀の卸しと運送に従事したが、その一年間に於ける總取引高は驚くべし五十萬弗に達した。



無論彼等の時代もよかつたに違ひないが、それにしても二人の青年が僅か四千弗の資金で、開業初年に五十萬弗の商賣をやつてのけたといふのは、ちよつと比類のない活動振りといはざるを得まい。

△斯うして事業が迅速に發展して行くに従つて、資金は多々益々必要となつた。彼は例の銀行からも屢々借り、父親のウイリアムからも引き出した。親父さんは相變らず一割の利息を取つた上、突然返済を請求したりして彼を間誤付させたが、それも度重なるにつれて、何時請求されても即日持つて行くだけの實力が彼に出来て来た。父のウイリアムはさうして息子の商人としての手腕の進歩を試練したので、決して「親子でも金銭は他人だ」といふ流儀を發揮したんぢやないさうだが、果して如何なるものか、其の邊は筆者も保證の限りでない。

△で、ロツクフェラーをして終生の大事業に結びつけた好運な機會は存外早くやつて来た。當時米國では石油熱が非常に旺んだつた。油田を一つ掘り當てれば百萬の富も忽ちにして成るといふので、猫も杓子も油田發見に憂き身を窶す有様だつたが、同時に一つ失敗すれば右左

りに一身代くらゐスツ飛んでしまふところから、石油採掘は亦一種の投機事業とも見做されてゐた。従つて此の方は迂濶に手の出せぬ危険性が潜んでゐたが、その代り石油の精製事業をなすなら、これは何處までもヤマ氣のない確實な事業である。

△ロツクフェラーは早くこれに目をつけた。穀物の販賣や運送も却々悪くない仕事には違ひないが、それにしても今や新たに起つて来た石油事業の將來有望なのに比べては、とても同日の談でない。石油といふ不可思議な地中の埋藏物は未來永劫に盡きる時はないだらう。さうして、石油の需用は到底穀類などの比でなくなるに違ひない。而も石油事業の恩恵たるや、最初の生産が自然の手によつて地下に行はれ、穀類の如く最初から人力を俟たねばならぬものではないことだ。然し今のところ一般に未だ石油に關する智識と經驗が充分でないから、先づその既に採り出されたものの精製に従事すること最も有利である——とかう考へたので、彼は共同者のクラークを説いて遽かに従來の營業を廢し、石油の精製事業に乗り換へることにした。ロツクフェラーの偉大な成功は此の時から始つたのである。



一 不況を打開する快腕

△併し事一度石油事業となると、そこに多大の資金を要するので、彼はジエームス・リチヤード・クラーク、サミエル・アンドリユース等と語つて一種の組合を作り、その方に専門の技術を有するアンドリユースが工場方面の監督に當り、ロツクフェラー達は販賣政策に活動することになつた。

△ところで此の最初の試みは、所謂船頭多くして船山に上るの類だつたのだらう、どうも成績が終始思はしくなく、共同者多数の意見で組合を解散し、石油工場を競賣に附するといふ呆氣ない結果になつた。然し、ロツクフェラーだけは飽迄石油事業の有利有望を確信し、然らば獨力でもやらうと決心して、工場を七萬二千五百弗に入札して買取つた。クラークは彼が餘り高價に入札した事を心配したが、ロツクフェラーは一向それを平氣だつた。無論彼にそんな金はなかつたが、例の銀行の頭取が彼の相談に應じて、無擔保でそれだけの金を貸し出してくれ

たのである。而して彼は再びアンドリユースと共同し、ロツクフェラー・アンドリユース會社といふものを設立して、アンドリユースは前回同様工場方面を、彼は専ら販賣を擔當して倦土重來の活動を開始した。此の時彼は二十六歳の血氣旺りであつた。

△で、今度は事業も着々發展の一路を辿つて行つたが、幾許もなく石油精製事業の有利確實が世間に知れ渡つて、出來星的同業者の簇出を來し、ために製品は市場に氾濫して、價格は次第に慘落し、多くの同業者は片端から倒産の非運に際會せぬばならぬこととなつた。

△然し彼は、これを以て寧ろ自己にとつて、絶好の機會だと考へた。即ち、今やまさに破産に瀕してゐる數會社を合同して一大會社を設立し、資金を潤澤にして大いに販路を擴張すれば、先づ以て生産方面の調節が自由に叶ふし、市場の左右も意の如くなると着眼したのである。アメリカの資本主義が未だその武装を整へ得られなかつた時代に、彼の此の考へは却々偉かつた。そこで兎に角彼は、自分の會社にハークネス・フラグラール會社其他二三を合同して、ロツクフェラー・アンドリユース・フラグラール會社といふ甚だ長つたらしい名前の新會社を組織し



たが、此の計畫は圖に當つて、次でこれを資本金百萬弗のスタンダード石油會社に、つち上げた。爾來彼の活動は追手に帆かけて走るが如きものがあつて、ダン／＼と資本の集中に力を注ぎ、一八七二年には更に多くの合同者を迎へて資本金を二百五十萬弗に増加し、翌々年また百萬弗を増資するなど、事業の發展と共に徹底的の増資、増資を行ひつゝ、銳意販路を世界的に擴張し、遂に一億弗の巨資を擁する世界最大の石油會社たらしめて、その宿望を満足せしめたのであつた。

### 一 カーネギーとの大鞆當

△彼は終始事業の上に、所謂大量生産主義、最廉價販賣主義を標榜且つ徹底化して、斷然たる勝利を得たのだが、然かも他面において、思ひ切つた大設備主義を採用して非常に巧く成功した。その一例を挙げると、一々石油を樽や罐に詰めて輸送する煩瑣と不經濟を除くため、輸送管の敷設といふ、地中のポンプで遠距離にある市場まで石油を送るトテモ素晴らしい大事業を

敢行して同業界をアツと云はしめ、また石油輸送車、石油輸送船などといふものを造つて、石油輸送上に一のエボツクを劃したのである。

△かうして石油で完全に成功した彼が、一時鐵鑛業に莫大な資本を投じて全米を驚かしたことがあつた。

それは彼の石油事業には何等の關係もないことだつたが、世界の製鐵界に王者の如く君臨してゐたピツツバークの例のカーネギーが、自社の利益のために不自然に鐵價の下落を阻止し、國內のみでなく世界の需用者を苦しめてゐる事實に憤慨して、カーネギーの鼻ツ柱を叩き折り、鐵價を正當な價格まで引下げようとしたのが、抑もの動機だつた。

△そこで彼は米國西北部の或る大鉄鑛山を買収し、その鑛石を輸送するために多數の大汽船を建造し、これをグレート・レーキの湖上に浮べてドン／＼鑛石を中央に送り出した。これがため鐵價は日を逐ふて下落し、流石のカーネギーをして兜を脱がせてしまった。此のロツクフェラー對カーネギーの大鞆當は大いに全米の血を湧かせ、いづれが勝つかと、ニューヨーク







六、富を得るには先づ貯蓄せよ。如何に苦しくとも、如何なる場合も何程かを貯蓄せよ。眞の富はそれから生ずるものである。

七、資本は如何に増大しても、事業の失敗と共に消滅するものであるが、別になしておいた貯蓄は決して無くなることはない。

八、事業界に於ける成功には、奇蹟といふものは絶對にない。

九、大きな、非常に大きな成功を勝ち得るためには、先づ自分自身を何人からも信賴される人間になすことである。そこに無限の資本があり、無限の報酬がある。

十、黄金の奴隷となること勿れ。寧ろ金錢を自己の奴隷にして驅使せよ。金錢の奴隷となる者に大なる成功は來たらぬ。それは金といふ死物に驅使され、束縛され終るに過ぎぬから――

事業は自己のためより、先づ社會人類のために行ふことに出發せよ。より世のため、より人のためになることによつてより大なる報酬がある。自己のためのみする事業に成功はない。

大なる報酬は來たらぬ。

### 出版界に君臨する佐藤義亮

#### 一 青春の血燃ゆる文學少年

△世に文藝ものの出版を以て知らるゝ新潮社の社長佐藤義亮は、秋田の師範學校を中途で止めて東京に出で、秀英舎のインキ樽洗ひから仕上げて、遂々あれままでになつた近代的の成功者だ。

講談社を大衆讀物の雑誌王國とすると、新潮社は文藝出版の最大權威だが、講談社の野間も師範出の教員上り。同じやうに過去に一度官費の飯を喰つた兩人が、轡を並べて出版界に馳驅するに至つたのは一奇である。

△佐藤は秋田縣角館町の生れで、早く東京遊學を志したが、家が貧しい荒物屋で、中學へ



も碌々遣つて貰へず、不本意ながら官費給與の師範學校に入つたやうなわけだつた。彼は十五、六歳頃から文學書に親しみ出して、暇あれば學科も何も抛り出し、小説類を耽讀する言葉通りの文學少年だつた。

『何日まで斯んな田舎の師範學校などにゐては仕様がな。文學を遣るためにはどうしても東京に出なければ駄目だ！』と文學熱が高まれば高まるほど東京へ出たい思ひが高じてくるのが常だつた。そこで當時の彼は、博文館で發行してゐた『學生筆戰場』といふ雜誌に投書しては、僅かに文學に對する熱意を慰めてゐた。『學生筆戰場』には屢々彼の作が入選した。而して當時未だ仙臺の中學生だつた吉野作造(法博)などが、好個の投書家仲間であつたといふ。

△師範に入學してから二年目、丁度彼の十八の時、日本の文壇には『帝國文學』が新たに現はれ、樗牛、桂月、羽衣、醒雪など赤門出の新人がこれに據つて文名を轟かせ、紅葉門下の鏡花、風葉等も花々しく文壇に名乗りを揚げて、百花燦爛、春風春水一時に来る文藝時代を現出した。此の新作家の輩出と文壇の隆興とは、此の田舎の文學少年をすつかり恍惚たらしめて、

愈々氣の向かぬ師範學校にゐるのが堪へられなくなつて來た。

『出よう！ 東京に出よう！ 東京の空の下で自分の若い力を試してみよう。苦學をしながらだつて文學の成就せぬ筈はない』

斷然から意を決した彼は、かねて共通の憧れに燃えてゐた同級の木谷、澤山の二人と共に、愈々東京遊學の誓を立てたものだつた。

### 一 雪崩を踏んで脱走

△時は明治二十八年の二月の下旬、北國の冬の夜は吹雪の荒れ狂ふ中に陰慘と眠つてゐた。彼と木谷、澤山の三人は此の吹雪の夜を衝いて、秋田市の師範寄宿舎を脱出した。

振り返つて見れば、誰か未だ起きてゐたか、寄宿の窓には赤々と灯が輝いてゐる。

彼は胸が迫つて來た――

『秋田市よさらば！ 寄宿舎よさらば！ 父母よ暫くの不孝を許し給へ！ 聴て喜びに満つる



日を以て許しを乞はん！ お身等に逢ふであらう！」と彼はこんなことを熱く心の中に叫んで他の二人と共に吹雪を衝いて黒澤尻へ走つた。

△當時は秋田市に鐵道も敷かれてゐず、四十里を隔つた陸中黒澤尻迄行かなければ汽車に乗る事が出来なかつた。その間の四十里は大半峻嶒な山中であつて、實は此の吹雪の中を行くことは危険此の上もなかつたのだが、そんな中でも行かなければデキに發見される懼れがあつたので、若い元氣に任せて決行してしまつたのである。彼等は二日三晩、吹雪や雪崩の危険と闘ひながら歩きづめに歩いて、漸く三日目の夜に始めて人家の灯を眺めることが出来た。これが黒澤尻の町の灯だつた。さうして彼等は、町に着くやいなや疲勞した身體を休める暇もなく直ちに東京行の列車に飛び乗つた……

△かうして目的の東京に來たものの、彼等には書物を賣り衣服を賣つて持つて來たほんの僅かの金しかない。そこで其の日からでも職を求めなければならぬわけだつた。佐藤等は一先づ神樂坂一丁目の汚ない下宿屋の一間を食事抜きで借りて、二枚の煎餅蒲團を粕にして三人でくまひまつて寝ることになつた。そして二人の友達を宿に残して、彼は朝から晩まで廣い東京を職を探しに歩いた。

で、やつこのことで三人の口が見つかつた。木谷は某會社の給仕に、澤山は新聞社の活版小僧に、而して彼は危く汽船の火夫に賣り込まれようとした所を遁れて、新聞配達なら勉強する時間も多くからうかと、配達をやることにキメた。

東京に於ける苦學生活の第一歩は始まつた。彼等は大概焼芋を食事代りにして喰ひながら、働き且つ勉強した。然し、此の田舎出の少年達にとつて、馴れぬ東京の勞働は却々容易なものでなかつた。

△一月ばかり経つと澤山が先づ參つた。木谷が苦しい顔をし出した。而して或る晩彼等は突然彼に向つて、東京を引き揚げて故郷に歸らうと云ひ出した。これを聞いた彼は、あの吹雪の夜を衝いて斷然上京を決行した時の意氣組みが、未だ一月そこ〜で弱つてしまつた此の二人の友達の顔を、呆れたやうに眺めないではゐられなかつた。



「歸る?! 君達は田舎に歸ると云ふのか!」

「歸りたくはないのだけれど……」と澤山が困惑したやうな顔をして、

「芋を食べて、逆も今のやうな烈しい労働には堪へられない……僕等は労働をしに来たんぢやない。勉強をしに来たんぢや。これぢや佐藤君だつて文學も何もあれやしな……」

木谷はただ悄然として側に控えてゐた。

「君! 澤山! 未だ一月にしかならないんだぜ。労働をしに来たのぢやないのも分つてゐる。勉強出来ないのも知れてゐる……然し、我々は今礎を築きつゝあるんだ。裸一貫で飛び出して来た以上、労働して喰ふのは當り前ぢやないか。いや、労働しながら勉強だつて出来ないことはない!……」

「君!」と澤山が彼の言葉を遮切つた。

「僕等は君のやうに強く……」

「馬鹿を云ひ給へ! 僕が何で強いんだ。僕だつて現在實に苦しいぞ。だが、今……どの顔下

げて故郷の土が踏めるのだ? ねエ、雪崩の音を門出の凱歌と聞いたぢやないか。成功しなければ屍となつて歸るんだと木谷は叫んだぢやないか! 何時までこんなことはしてゐない。今の苦しみは必度やがて美しい實を結ぶ種ともなり肥料ともなるんだ……」

△が、二人の意は遂に翻へらず、矢張り故郷に歸る話になつてしまつたのである。

「仕方がない。それまで歸りたい君達を無理に止めることは出来ない。僕だけ一人残つて東京で苦戦しよう……」と彼は寂しさうな語句を吐き出して苦しさに腕を組んだ。

### 一 友に別れて悲壯な決心

△兩人の故郷へ歸る日が来た。一月ちよつと前に三人一緒に勇んで降りた上野驛のプラットホームで、彼等は別れの言葉を交はさなければならなかつた。

「佐藤君! 達者であつてくれ給へ……」

「ウム……」



澤山が車窓から彼に云つた慰めの言葉に、返す言葉も出ぬほど心が波立つてゐた。  
 「二人とも、途中を氣を付けて行き給へ……僕の両親に、僕が元氣で勉強してゐると云つてくれ給へ」

彼は眼頭が熱くなつて來たのを感じた――

「やがて、不孝を詫びる日があるだらうと告げてくれ給へ……」

汽車は動き出してゐた。

「左様なら、しつかり遣つてくれ！」

「佐藤君！ 達者で……」

「……………」

△彼は寒いブラットホームに立ちつくしてゐた。

「行つちまつた！ 彼等は故郷へ歸つちまつた。然し俺は……」とこんなことを呟やいて、

「よし、一人だ！ 働かう、勉強するぞ！ 俺はどんなことがあつても、文學で身を立てぬ中

は故郷の土を踏まない」

で、かうして廣い東京でたつた一人になつた彼は、益々心を鞭撻して目的のために生活と戦つた。

朝暗い中から起きて配達をすませた後、下宿へ歸つて一生懸命に勉強した。文學志望と云つてもそれは漫然たるものだから、先づ凡ゆる智識に接して讀書の力を養ふ必要があつた。夜は二時、三時まで、薄ッ暗いランプの下で創作的な筆を執つた。が、貧窮のドン底にゐた彼は讀みたい本を自由に讀むことも出來ず、毎夜、神樂坂邊から神田あたりの本屋へ一軒毎に這入つては、その店頭で十頁位づゝ立ち讀みをし、かうして一夜の中に一冊の書物を読み切つたりしたものだった。此の本屋の立讀みの權威が、先頃圓本の洪水を起した新潮社の佐藤義亮だったのだから面白い。

一 森鷗外と肩を並べて



△ところで折角取り附いた新聞配達も、東京の地理を知らぬ者は不便だといふ口實の下にやがて解雇されてしまった。多分これは夜遅くまで筆を執つてゐるために、朝の配達にムリが出来て、苦情でも出たのではないかと想像される。その後彼は運送屋の配達になつたり、荷車を扱いたり、随分過激な労働をしたらしいが、兎に角目的の文學修業を怠ることはなかつた。そのうち、市ヶ谷の秀英舎の見習職工に口のあるのを見つけた。秀英舎は代表的な印刷工場で、満更目的の文筆に縁のない事業でない。佐藤は喜んで此所へ入ることになつたが、最初の仕事はインキの樽洗ひや工場の掃除をすることで、終日眞黒になつて働いて日給僅かに十錢だつた。十錢は安過ぎるやうだが、當時とすればそんなものだつたのである。

彼は此の十錢の日給に不平も云はず、ひたすら黙々として働いてゐた。

△かういふ惨憺たる境遇の中にも、間もなく一道の光明が射し込んで来た――

當時文壇一方の權威雜誌だつた『青年文』といふのに、彼の投書した『文壇小観』といふ一論説が當選して、森鷗外氏等の文章と共に堂々と發表されたのである。

彼は上京後始めて、心からなる快心の笑みを漏すことが出来たのだが、同時に此の論客の何人であるかが、秀英舎の支配人の知るところとなつた。

「佐藤さん。支配人さんがちよつと……」と給仕に呼ばれて、汚ない作業服のまゝ支配人室に入つて行くと、

「君ださうだね、「青年文」に、あれを發表したのは……」

「ハア……」と東北人特有の重苦しい態度で多少のはにかみを見せてゐると、

「どうも君の様な文章家に樽洗ひをさせておいたのは少し酷かつた……」と笑ひながら、

「明日つから校正部にでも廻つて貰ひたいと思ふのだが、佐藤君どうだね」

「ハア、大變結構です！」

「それではそのつもりで……給料も今までの二、三倍は出しますよ」といふことで、彼は一躍校正部に抜擢されることになつた。

△校正係といふと今日では可なり馬鹿にもし馬鹿にもされてる仕事だが、當時は記者同様の